

第四章 在日二世の朝鮮人虐殺ドキュメンタリー映画

はじめに

関東大震災の朝鮮人虐殺に関するドキュメンタリー映画として、呉充功監督による二本の映画がある。『隠された爪跡』（一九八三年）と『払い下げられた朝鮮人』―関東大震災と習志野収容所―（一九八六年）。以下、『払い下げられた朝鮮人』である。

『隠された爪跡』は、呉監督が横浜映画専門学院（現・日本映画大学）の卒業制作を契機に撮ったドキュメンタリーである。卒業制作のテーマを考えていた矢先の、一九八二年の九月、「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し慰霊する会」により、旧四ツ木橋（現・東京都墨田区八広）でおこった虐殺犠牲者の遺骨の試掘がおこなわれる。『隠された爪跡』は、その時の様子や当時の体験者から話を聞いて朝鮮人虐殺の問題に迫ったドキュメンタリーである。

また、『払い下げられた朝鮮人』は、「陸軍支那人収容所」（以下、習志野収容所）に収容された朝鮮人が収容所周辺の村落に「払い下げられて」虐殺された問題に焦点をあてて製作されたドキュメンタリーである。

本章はこの二作品を撮った、在日朝鮮人二世である呉監督の、作

品ができるまでの歴史と作品について論じる。それぞれの映画には、すでに故人となつた震災時の被害者や加害者が登場して証言する（例えば、前者では曹仁承、後者では君塚国治など）。これは現代において当時の体験者からの聞き取り調査が困難ななかで、歴史学的に貴重な資料であることを意味している。朝鮮人虐殺に関心のある研究者はすぐにそれを資料として活用しようと考えがちだが、それをする前に、これらの作品を撮った在日二世の監督とその監督の思いについて考えてみたい。

とは言え、私は専門的な映画論、例えば撮り方などの技巧についてや、他のドキュメンタリー作品との比較論などは展開できない。そのような評論としては以下のものがある。

まず、高橋武智の「未決の責任追及にこたわつて『神軍』を観る」（松田政男・高橋武智編集『評論 ゆきゆきて、神軍』倒語社、一九八八年）がある。高橋はもと一八世紀フランスの啓蒙文学・思想を専攻していたが、ペ平連の別組織であるジャテック（J A T E C）の活動家として知られる。特にベトナム戦争の米軍脱走兵を海外へ逃がす活動が有名である。高橋による呉監督の作品に対する批評は、映画『ゆきゆきて、神軍』（原一男監督、一九八七年）の映画『ゆきゆきて、神軍』は、独立工兵隊第三六連隊に所属して

いた奥崎謙三が、ウエワク残留隊で隊長による部下の射殺があったことを知り、遺族と共に生き残ったもと兵士の家を尋ね回り、真相を追求するドキュメンタリーである。奥崎は映画に登場する前に不動産業者を殺し、天皇にパチンコを撃ち、天皇のポルノ・ビラをビルからまいた。それにより独房生活を一三年九カ月過ごした。その体験を奥崎は、結婚式の媒酌人の挨拶で語ることで映画ははじまる。自家用車を異様な街宣車に改造して皇居前で天皇を批判し、もと兵士のところを訪ねては暴行も辞さずに証言を得ようとする。奥崎の強烈な個性と奇抜な行動が映画にはえがかれている。最後は改造銃を持つて、もと上官である家に行き、上官を殺そうとするが、その息子を撃つて逮捕されて終わる。

高橋武智は『ゆきゆきて、神軍』に対して、「日本人による戦争責任追及が戦後四十年以上たった今も無きに等しい状態にあること、しかもこの事実が平均的日本人の意識にもものぼっていないことを明らかにした」この一点「四」を称えている。一方で、「本来は遺族を前面に立て、奥崎が細部にいたるまで真実を動かしたがたたくおさえた上で、迫力に欠けるニセ遺族でなく「遺族とは途中で仲違いし、奥崎の妻を遺族に仕立ててもと兵士の家に訪問する」、本物の姉弟「遺族」を伴って村本「銃殺したと思われる上官」宅へ乗りこみ、有無を言わせず事実を確認させる手だてを講ずるべきであつた」と批判した。

それにより、「現場における戦争責任を追及する上での模範的な実例になった」と惜しむ^五。

高橋が「模範的な実例」と評価する映画が、ランズマン監督の『シヨアー』（一九八六年・フランス）と呉充功監督の前述の二作品である。『シヨアー』（ヘブライ語で大破局の意味）は、「ナチスのユダヤ人迫害の全容をとらえなおそうとした」九時間半の大作で、監督によるインタビューだけで全編を構成している。高橋は作品について「屈折した心理と生きざまにいたるまで——映像とセリフだけで観客に刻印することに成功した」と評価している^六。それに対して、『ゆきゆきて、神軍』はインタビューの奥崎が「銃殺事件のストーリーリ」を自ら思い描き、相手に押しつけて「いると批判している^七。呉監督の映画に対しては、特に第二作目の『払い下げられた朝鮮人』について次のようにいう。

映画の核心をなす貴重な体験者——その多くがその後亡くなったという——が登場する場面では、インタビューは画面に姿を現さず、ひたすら彼らに語らせる姿勢が一貫している。「中略」語りたくないこと、絶対語れないと思われることを引きだすことにこそ、インタビューの技量は発揮されねばならず、そうしてこそ、死者への最高の供養になるのだ。ランズマンも

呉もそれに成功したハ

高橋の『ゆきゆきて、神軍』への批判は、戦争責任を追及しそこない、それが「無きに等しい状態にある」現状に追隨している点にあり、加害者もあいまいにやり過ぎる奥崎が加害者の話を聞くのであらず、一方で、呉監督の作品に登場するその現状を批判している。ある。それを引き出すことに成功した監督を高橋は称えており、そのような行為が戦争責任追及へ繋がると考えている。同じように、ドキュメンタリー映画監督の土本典昭は、「殺人という事実が当事者の口から、このように克明に語られた映画を知りません」と述べている。土本監督は、安保闘争のドキュメンタリーとして『パルチザン前史』（一九六九年）、水俣病のドキュメンタリーとして『水俣―患者さんとその世界』（一九七一年）などの作品を撮ったことで知られる。土本監督も加害者の口から「語られた」とこれを称賛している。

このようにドキュメンタリーの作品として、高く評価される呉監督の二作品であるが、管見の範囲では監督自身を論じたものの、監督の作品の関係を論じたものはない。よって、本章ではそれらの課題に取り組みことにする。特に呉監督の作品における「責任追及」の

あり方や、体験者の「語り」に注目する。なお、監督には二〇一四年六月に、インタビューで映画に
関する文章は、インターネット上に存在しない。それら作品に至るまでの経過
もが記された文章が、インターネット上にないからである。よって、その監督の作品に至るまでの経過

【吳充功監督 二〇一四年一月六日小園撮影】



第一節 映画に出会うまで

吳充功監督は一九五五年東京の下町、葛飾区立石で生まれた一〇。父親は全羅南道の潭陽の出身で、母親は全羅南道の宝城の出身だった。潭陽は竹細工などの工芸品で有名な所で、宝城は緑茶畑が広がる農村地帯だった。いずれも今ではリゾート化が進んでいるらしい。吳監督は父親が四〇歳の時の子どもで一人っ子だった。父親は結婚する前、親戚の観光写真家の助手をしており、ロシア、満州、大分の別府温泉など各地を回ったようである。結婚後すぐに日本に渡り、監督が生まれた頃は小さな再生ビニール工場をやっていた。吳監督は五歳の頃から「難聴」となり、その影響で発音や聞き取りがうまくできなくなってしまう。二。小学校は当初、葛飾区立の小学校に通っていたが、民族差別や「難聴」により、よくいじめられたそうである。三。いじめのきつかけになったのは「キムチ弁当」と「たくあん弁当」のニアミスの結果」と表現している。四。そのような差別によつて、吳監督は当時よく悩んでおり、その悩みを作文にぶつけた。すると、担任ではない「共産党系の先生」が、「朝鮮学校に行った方がイイんじゃないの」と勧めてきて、母親と相談して荒川の近くの東京朝鮮第五初中級学校（以下、初中級学校）に行くことになる。五。小学四年生から転校した吳監督だったが、初中級学校に行つてか

「難聴」に對する差別があるからだ。初中級学校時代、荒川ではよくサッカードやマラソンの練習をした。まさか、朝鮮人虐殺がこの辺りであったということは知らなかったという。学校の先生も教えてくれなかった。そして、自身がここを舞台に後に映画を撮ることも想像していなかっただろう。

その後東京朝鮮中高級学校（北区十条台、以下、中高級学校）に入學した。高校二年の時は新聞部に所屬して部長として記事を書いていた^{一五}。當時、校内に新聞部はなく創設のため仲間を募り、学校と一年間にわたり交渉した末に認められた。この頃の将来の夢は新聞記者になりたかったようである^{一六}。中高級学校卒業後は朝鮮大学校に進學するが、中退してしまふ。その後は民族系の出版社で雑誌編集集などの仕事をしていたようだが、新聞記者の夢をあきらめきれないでいた^{一七}。

その頃に呉監督は詩を書くようになる。監督は「僕が詩を書くところ、いはじめたのは、高校を卒業し、社会人として働きたいと思ったからで。自分の中にあるものを、朝鮮の文字で表現したいと思った。何かです^{一八}と述べる。しかし、監督はこの「自分の中にある」と何かをうまく表現できないでいた。たまたま、朝鮮民主主義人民共和國から送られてきた絵本を読んで「知らない単語があまりにも多

く「ショックを受ける一九。監督は「三歳、四歳の子供たちが理解する言葉を知らないで、観念的な、難しい言葉ばかりで詩を書いていたんだな」と反省させられた。子ども頃からよく作文を書き、高校三年生の時は新聞部に所属し、新聞記者を目指す呉監督にとつてこのショックは大きかったと思われる。「自分の中にあるもの」の新しい表現を模索して、呉監督は今村昌平監督が校長を務める、横浜映画放送専門学院（現在の日本映画大学の前身、以下、専門学校）に進学するが、進学前の気持ち

日本では、歴史的なさまざまな状況の中でわれわれは生まれ育つて、ある意味でいえば文学的に非常に情緒があるし、どの民族的あるいはどの外国にいても、ね、在日朝鮮人の持つ生活分的なところは計り知れないものがあると思ふんです。自分はそのういいうなかで生きていないが、どうしてもこの足らないものを書いてしまふのか、考えたわけ。そして思ったことは、ものごとをやつと自分の目で見て、聞いて、調べて、そのういう体験をしたか、と感ぜたわけ。二〇

吳監督は自分の内にあるものをうまく表現するため、いろいろな見聞や、体験を求めた。専門学校に入る前に、盛善吉監督のもとを訪ねたのもそのためだろう。たまたま読んだ新聞に、盛監督が朝鮮人被爆者のドキュメンタリー映画を撮るためにアシスタントを募集していた。その頃、吳監督は映画の撮影に関する知識はなかったが、応募したら採用され、監督助手を務めることになった。盛監督の作品には『世界の子らへ』朝鮮人被爆者の記録』(一九八一年一月)というドキュメンタリーがある。吳監督が参加した撮影は後者の作品と思われる。ともかく助手になつた吳監督は長崎・広島を回った。軍艦島にも行った。製作予算がないから機材を積んだ重い荷物を担いで各地を回り、長期滞在する所では冷房もないところでは三カ月半年過ぎたという。そのような過酷な体験も吳監督には「熱い体験」であり、表現方法を模索するたに必要なか貴重な体験だった。このような体験が映画への関心に向かわせたのか、表現方法としての可能性を感じたのか、今村昌平の映画専門学校に入学することになる。その時、吳充功監督は二七歳だった。

第二節 ラジオ・ドキュメンタリー

映画専門学校に入った呉監督は、なかなか血氣盛んな学生だった。ようである。呉監督の周りの友人は、一七、八歳くらいの学生に交じって、二五、二八歳くらいの、他の学生よりはやや年長の者も集まっていた。その友人たちと一緒に、なつて呉監督は学校の予算が批判や、經理の公開要求などの運動をしていたようであるが、その運動の一つにドキュメンタリー・ゼミ設置要求があった。

校長の今村昌平監督もドキュメンタリー映画を多数撮っていて、例えば失踪した人の行方を婚約者と追った『人間蒸発』（一九六七年）や、従軍慰安婦に焦点を当てた『からゆきさん』（一九七三年）などの作品がある。運動ではこの点についてドキュメンタリー映画の重要性を主張したようである。その運動は功を奏したようで、ドキュメンタリー・ゼミができ、呉監督はそこに入った。担任は山谷哲夫監督と武重邦夫監督だった。山谷監督は『沖繩のハルモニ』証言、従軍慰安婦（一九七九年）という作品があり、武重助監督はその頃、今村監督の『檜山節考』の助監督をやっていた。

その授業のなかで、ラジオ・ドキュメンタリーという音声だけのドキュメンタリー作品を作ることになった。呉監督は、一九七〇年代にあった「国士舘大学生の朝鮮高校生に対する暴行事件を素材にして」作り、「日本人のスタッフ五人ぐらいで手がけた」ということ。

一九七〇年代は東京朝鮮中高級学校の生徒（以下、朝高生）に対する集団暴行事件が新聞でも取り上げられ問題になっていった。例えば一九七〇年三月一二日『朝日新聞』（夕刊）には、「帝京商工生が集団暴行 朝鮮高校生に」という記事がある。それによれば、三月一二日午前一時四十分頃、東十条駅近くで朝高生五人が、帝京商工高等学校（現・帝京大学高等学校）の生徒五〇人に囲まれ暴行を受けたという。記事の最後には「最近、帝京商工と朝鮮高校生とのトラブルは五、六回も起きている」と記されている。ちなみに二つの学校は最寄駅が同じである。

同年五月九日『朝日新聞』には、「在日朝鮮人の人権を守る会」（幹事長・田代博之弁護士。以下、人権を守る会）の調査報告を記事にしている。それによると四月八日「始業式の日、百人を上回る学生が他校」が十条駅の周辺をうろつき、そのうちの二、三十人が遅れて登校して来た三年生を同駅ホームで刃物をちらつかせておどし、顔などをなぐりつけて数日間食事もできないほどのけがをさせた。その他、原宿駅（四月一七日）、亀有駅（四月二三日）などでも暴行事件がおきている。

それにより警察も、「王子署では、四月初めから登下校時に毎日私服の警官十二人、パトカー二台を派遣して駅構内や通路のパトロールをしているほか、赤羽署、板橋署などでも外勤系、少年係の警

警官を配置し、警戒」にあたつた。しかし人権を守る会は、「捜査は緩慢で、被害者である朝鮮高校生を加害者扱いにする場合が多い」と警察を批判した。それに対して、警視庁少年二課は「どっちが悪いかは、鶏が先か卵が先かを論議するようなもので、ケース・バイ・ケース。普通の少年事件と同じやり方で処理している」と述べた。警察への同様の批判は在日本朝鮮人総聯合会（以下、総聯）もしている（同年五月二七日『朝日新聞』）。

一九七三年八月一日の『読売新聞』では、八王子駅で同年六月四日におきた学生同士の暴行事件に際しての、警察による朝高生への暴行に関する記事が掲載されている。それによれば「日本人高校生と衝突した朝鮮高校生十五人が八王子署員に連行された際、同署員から暴行を受けた」というもので、駅ホームで「ピストルを突きつけられ脅されて連行され、途中で「二、三十人の警官隊から腕をねじられたりけられたりの暴行を受け」たとされる。外国前述の調査では「暴行事件は日韓交渉の前後から多くなり、外国人学校法案や出入国管理法案など、在日朝鮮人につながる問題があるたびにふえている」と指摘している。同様に政治的な問題との関係性は、同記事にコメントを寄せている藤島宇内二三の指摘があり、その他、依田憲家^{二四}、総聯^{二五}、朴春日^{二六}などが指摘している。一九七〇年五月二七日『読売新聞』には、総聯による前日の記者

会見において暴行事件を批判した声明文に関する記事がある二七。
 それによれば記者会見の前日の二五日の夕方に「代々木駅近くで、
 朝鮮高校七人が世田谷の国士館大付属高校生二十人に袋叩きにされ、
 制服上着やバンドを奪われるなどの事件がおきた」ことが記されて
 いる。また、同記事では国士館大付属高等学校（以下、国士館高校）
 の草地貞吾校長代理のコメントが記され、こちらも朝高生のグルー
 プから暴行を受けているといった内容になっている。
 一九七〇年五月二九日『朝日新聞』では「朝鮮人高校生と間違え
 暴行 国士館生徒一二人取調べ」と題し、五月一四日の事件を取り
 上げて「国士館高校の生徒一二人が目黒区の私立高校生二人を朝鮮人
 高校生のもりで暴行したとある。『お前は朝鮮人だろう。国士館を
 なめるな』とカシの棒で殴打された。さらに、翌年の四月一八日『朝
 日新聞』の記事では、争いの最中を通りがかった「主婦」が巻きこ
 まれた事件が掲載されている。
 依田憲家によれば、「マス・コミは最初この事件を単なる不良同士の
 乱闘事件として扱い」、「一般市民にも危害を与えている事実が明
 らかになるにしたがい、ようやく朝高生も『被害者の一部』として
 取扱うようになった」と指摘している二八。頻繁におこなわれる朝
 高生暴行事件に関与していた、国士館高校の対応は、当初は「うち

の生徒「も被害をうけている。それどころか朝鮮高校近くの二、三の高校では、うちの生徒の被害に倍する程の災難にあつていて聞いている」。「朝礼やホームルームで耳にたこができるほど暴力をふるうなど注意している」と、こちらには特別に、非があるわけではないことを強調していた二九。

しかし、一九七三年の六月一日に国士館大学総長の柴田梵天が謝罪会見をおこなった。この謝罪会見は、その前の六月一二日におきた高田馬場駅での暴行事件と関係していると思われる。この事件は夕方、高田馬場駅で待ち伏せしていた二〇人の国士館大学生が「朝鮮人が乗っている！」などと叫びながら、電車のガラスを破り、また、ドアが開いて車内に侵入すると朝高生に暴行を加えた三〇。

柴田梵天の謝罪会見の様子は六月一日『読売新聞』（夕刊）の記事に掲載されている。それによると、「親の心を知らない一部の学生が、とんだことをしてかしたが、大部分の学生はまじめに勉学に取り組んでいる。在留朝鮮人については、偏見教育をしていない」と述べている。さらに暴行事件に加わった学生の指導と配慮が欠けていないか、また、暴力否定は本校の方針だが、学生全員に行き届いていないか、また、暴行事件の責任にし、もともとの教育方針は間違っていないかを一部の学生の責任にし、もともとの教育方針は間違っていないことを述べ、会見が終わると最敬礼して立ち去った。暴行事件

とを強調した会見だが、それなら六〇年代後半から頻繁におこつていた暴行事件をなぜ、これまで放置してきたのだらうか、柴田の弁明は理解し難い。このような集団暴行事件が吹き荒れる時代に呉監督自身も高校生であり、その渦中にはよくおこつたと述べている。あの国士館の駅で集団暴行事件はよくおこつたと述べている。あの国士館の連中つていうのは、まあ、お互いそうなんだけど、ああ、何々さんは何々駅で乗り換えたか。マ、ク、し、合、う。お互い、ああ、何々さんは強い奴も含めてさあ、と振り返っている。呉監督の友人も犠牲者になつておと、千葉県から通う、まじめな級長だった友人が、いつも早朝に登校すると、友人は「何か」助かったんだけど、二ヶ月くらいもう病院に入院して「何か」という。呉監督の専門学校で作成したビデオ・ドキュメンタリー『理由なき襲撃』は、その友人にインタビューした。さらに、国士館大学の学生、帝京大学の学生にもインタビューした。お前は「何でこんな暗いものばっかりでオレを撮るんだ」と言つて、「イヤだった」そんなうである。共に作業する日本人スタッフは、最初は「興味本位」で参加だったが、暴行事件について知つていくうちに驚きに変つた。

た。さらに、その後の製作過程で「スタッフの中にも朝鮮に対する偏見というものを自分ではそうじゃないと思いついてはつきりと打ち消す自信がない、というような状態が浮き上がってきた」、呉監督は「それで、民族差別とか偏見とかいうものをもっと深くつきとめていけたらなあと感じた」^{三二}。

ラジオ・ドキュメンタリーを製作した後、呉監督はどうすれば「民族差別とか偏見」を「深くつきとめていくか考えていたが、なかなかテーマが浮かばなかった。そんな時にスタッフの一人が吉村昭の『関東大震災』の本を読み、「朝鮮人虐殺の模様を卒業制作としてドキュメンタリー化しないか」と言い出し、「ちようにど荒川河川敷で発掘作業が行われるとの情報も入った」ので「とにかく撮ってみようとなった」^{三三}。

朝高生暴行事件が頻繁におこなわれていた頃に、事件から関東大震災の朝鮮人虐殺を想起させて書かれた評論が存在する。一九七三年六月二日『朝日新聞』（夕刊）の記事には、評論家の朴春日が志賀直哉の『震災見舞』を引用しつつ、次のように述べる。「志賀直哉の日記に登場する「刺子の若者」は、まさに時の権力が仕組んだ朝鮮人虐殺劇の中で、かれが結局、人間屠殺をあえてするところまで転落したことを物語っている。しかし歴史はくりかえさない」と暴行事件を批判し、「朝・日両国人民の友好と連帯」を願った。

鮮 虐 よ 撮 監 は
人 殺 う り 督 、 吳
虐 の に 、 は 朝 監
殺 の なる そ 身 人 の
問 題 に 。 製 も 虐 場
問 題 取 そ 作 体 殺 合
題 と の 過 験 に は 、
接 組 問 程 し つ い 一
続 む 題 で た 暴 作
し こ を 日 行 あ 目
た と さ 本 事 ま の
。 に ら 人 件 り 『
な に 深 タ か 知 隠
る 。 め ツ ー 、 こ れ
朴 る フ と ラ が 爪
春 た 民 ジ オ な 跡
日 め に 族 差 ・ か 』
は ス 別 ド キ た 撮
ま ツ の ュ と 影
さ フ 問 メ 思 が
に と 題 を 思 決
逆 の 共 に 議 タ れ
の 過 程 朝 論 リ 。 ま
で 鮮 人 する を 吳 まで

第三節 映画製作における「真の出发点」

映画『隠された爪跡』は、呉監督と蒲谷雄二、小島透の三人が中心^{三四}となつて「麦の会」という自主制作グループを作つて約一年かけて仕上げたドキュメンタリー映画である^{三五}。製作スタッフには他に一八・二〇歳の「青年たち」が集まり、一〇人ほどだった^{三六}。当初は、「卒業するまでの三ヶ月間に何とか無難に完成したらいいな」と、簡単に考えて「とりかかったそうである」。

専門学校の時代の生活は、他のスタッフも含め「ン高い月謝と観た映画のチケット代をかせぐために、しょっちゅうアルバイトをしながら学校と映画館を往復する毎日」だった^{三七}。そのため、なるべく自分たちのバイト代を使わないで、「学校の渋い製作割当て金」でおさめようと「作品をセコクセコク仕上げることだけ」を考えていた。そして「何とか無事に卒業して、誰よりもカッコ良い映画会社に就職し、一日でも早く皿洗いからサヨナラする日を夢見て、それだけ時間のある限り自分のシナリオを一生けんめい作つていた」。呉監督は「記録映画を作るのに困難だったのは、資金だけではなく、ほとんど取材の下地もなしに突然カメラをかついでこの穴をテーマに決めずにのぞきに行った私自身のいいかげんさ」だったという。この「穴」とは、冒頭にも記したが、「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し慰霊する会」(その後、「慰霊」を「追悼」に

変更。以下、「発掘し追悼する会」による遺骨試掘作業で生じた穴である。同会は小学校の教師をしていた絹田幸恵が中心となり結成された。絹田は学校の社会科の教材に活用するために荒川放水路の歴史を調べていた。「子どもたちは荒川放水路が人工の川であること」を知ることが教材化のための調査の発端になっていると、「デマの絹田は地域を歩いて年配者から聞き取り調査をしている」と、デマのためにはたくさんの方の朝鮮人が殺され、旧四ツ木橋（現・東京都墨田区八広）の下手にうめられた」という話を聞く^{三九}。それから朝鮮人虐殺に関して調査するようになった。「発掘し追悼する会」がおこなった聞き取り調査は、一九九二年までの段階で、一九八二～一九八五年の間に集中し、一〇〇名をこえ、インタビューの回数はおよそ一五〇回になる^{四〇}。そのなかで会が試掘の場所を決定するのに重要な証言をした人がある。以下、震災時、軍隊の駐屯所になっていたという、農業を営んでいた人の証言を引用しよう。

荒川駅の南の土手に、連れてきた朝鮮人を川の方に向かせて並べ、兵隊が機関銃で撃ちました。撃たれると土手を外野のほうへ転がり落ちるんですね。でも転がり落ちない人もいました。何人殺したでしょう。ずいぶん殺したですよ。あとで石油をかけて焼いて埋めた。私は穴を掘られました。あとで石油をかけて焼いて埋めた。

んです。よく焼けないままでした。それに他から集めてきたのもいっしょに埋めたんです。いやでした。ときどきこわい夢を見ました。その後一度掘ったという話を聞いた。しかし完全なことはで
きなかったでしょう。いまも残っているのではないかなあ

証言に登場する旧四ツ木橋付近での兵隊が機関銃で撃った虐殺は有名であり、当時陸軍野戦重砲兵第一連隊第六中隊所属の一等兵だった久保野茂次の九月二〇日の日記には以下のように記されている。

望月上等兵と岩波少尉は震災地に警備の任をもつてゆき、小松川にて無抵抗の温順に服してくる鮮人労働者二百名も兵を指揮し惨じやくした。婦人は足を引張りまたを引裂き、あるいは針金を首に縛り池に投込み、苦しめて殺したり、数限りのぎやく殺したことにについて、あまり非常識すぎやしまいかと、他の者の公評も悪い。「欄外に、「九月二日、岩波少尉兵ヲ指揮シ鮮人二百名殺ス（特進少尉）」と記入」

また、当時、同連隊第三中隊長大尉の遠藤三郎は、「発掘し追悼する会」の聞き取り調査において、岩波少尉は「中隊長の許可も受け

ずにだいが殺しているんです。戦にいつて敵を殺すのと同じように、朝鮮人、支那人を殺せば手柄になると思つて」いたと語る四三。さらに官憲側の極秘資料「秘関東戒嚴司令部詳報」(「震災警備ノ為兵器ヲ使用セル事件調査表」)にも記されている。

以上のように、軍隊による虐殺が四ツ木橋周辺でおこなわれたが、軍隊の虐殺だけではなくて、自警団による虐殺もあつた。その証言をおこなつた人のなかに曹仁承がいる。

曹は九月一日夜に四ツ木橋付近で自警団に拘束された四四。その後、二日に寺島警察署へ連れて行かれる。「途中『あそこに朝鮮人が逃げるぞ!』と誰かが叫べば、皆んながいつせいにとびかかり、悲鳴と共に同胞は虐殺された」という。曹自身も自警団に襲われ、生涯足を引きずる傷をおわされる。警察署の周りには、「血走った」自警団へ曹の言葉では「消防団」が多勢でたむろしていた。襲いかかろうとする自警団を警察は静止して、曹は署内に入ることができた。二日の夜は庭内で寝た。しかし、夜に騒ぎがおこり、周りの朝鮮人は殺されるかもしれないと逃げだした。曹も逃げようとしたが、塀をのぼつたところで、外の自警団が襲いかかり曹は再び庭内に落ちる。外に逃げ出すことはできないので、そばの木にのぼつて庭内の様子を見たら、逃げだした朝鮮人「八人」が警察に殺されていた。庭内の砂利は血に染まり「座っていられなかった」という。

呉監督は映画『隠された爪跡』を製作するための取材のなかで最も印象的だったのが、曹仁承だったという四五。映画には、大井競馬場近くで営んでいるホルモン焼きの店とともに登場する四六。曹の妻である朴粉順も台所でキムチをきざむ姿が映し出される。その後店内で朴が語るシーンがあり、次のように言う。「お父さんが、急に夜中に起きちゃってもう、暴れたり、手たたいて人のほつぺたひっぱたいたりするから、私はほんとあの時病気だと思ったの。この人なんか頭がおかしいかなんか病気だと思って。それ——と何か月もがまんしていたんだけど」。

朴がその件をたずねても、はじめの頃は曹は何もこたえなかった。しばらくしてから、「震災の時ひどい目にあったから、それが今時たま夢で見ちゃって驚いてね、そうなるんだって」と曹がいったという。映画の最初に登場する証言が、曹の震災時のトラウマに關してである。このシーンは、私には、この映画は朝鮮人虐殺の「終わらない」問題をえがいたものと主張しているように感じる。なお、四ツ木橋周辺の虐殺の理由を「発掘し追悼する会」は、「旧四ツ木橋は避難路の要衝であり、避難民が殺到した場所である。しかも放水路工事などで朝鮮人が多く居住していた。だから軍もここに駐屯し虐殺がおこなわれたのではなかと考えている四七。一九八二「発掘し追悼する会」は、前述の農家の人の証言から、

年の九月二日、三日、七日に試掘をおこなった^{四八}。吳監督はその様子撮影するにあたり、「あくまでも、発掘と、その隠されてきた「遺体」の発見を記録することのみ神経が集中し、どちらかという」と当然発見されるであろう、それを映像にとらえることが可能であるとは掘り出せなかった。

この原因として、震災直後に「旧四ツ木橋の下手で、警察官らが遺骨を掘り返した」^{五〇}ことが考えられる。というのも、九月四日夜から五日未明にかけて、南葛労働会の川合義虎ら八名、純労働者組合の平澤計七ら二名の計一〇名が亀戸署内で虐殺された^{五一}。い

わゆる亀戸事件^{五二}である。その犠牲者も多く、朝鮮人犠牲者と共に埋められた。その後九月一三日に遺族らが埋められたとされる荒川放水路の現場に遺骨を掘りおこしに行くが、亀戸署が前夜に掘り

おこしたことを知る^{五三}。この時に朝鮮人の遺骨も掘りおこされた可能性が高い^{五四}。

「古老の記憶をもとに三日間にわたって掘り下げた穴から出たのは、水と泥だけだった」が、吳監督は「かえってのめりこむことになる」^{五五}。発掘中は、マスコミが多く訪れ、見学していた地域住民を奪いあうように囲んだ。あつという間に人山ができあがり、地域住民も興奮してマスコミの取材にこたえようとする。その様子を

吳監督は「証言と狂言が交差」している状況だったと表現した^{五六}。
吳監督は当時の様子を次のように語った。

掘ってみると新聞などを見て、だいたい七〇歳以上の飛び入り証言者が現場にずいぶんくるわけです。あつ俺は見たよ、聞いたよというふうにところが発掘が終わってみると、遺骨が出なかつたこともあつて、町の人々はわざと無関心をよそおひのね。おらが街が新聞に出て悪い街になつたという一般的な感情で。重要な証言をした人も、よけいなことをしやべらなかつたから、老人たちも喉まで出かかつたことをしやべらなかつたのね。^{五七}

その後、「発掘の終わった街の様子」は、熱っぽい興味から冷たい無知、無関心、無視へと変化していった^{五八}。吳監督のもとに残つたのは、三千フィートの撮影フィルムと三〇本余りの証言をおさめたカセットテープだった。夏休みのアルバイト代は三千フィートのフィルムに消え、学校から支給された予算はフィルムの現像代です。フィルムに消えた^{五九}。結局、「アルバイト」といった一年間を送ることになる

数日後、発掘現場近くに家がある呉監督のもとにスタッフが集合した。何度も記録フィルムを映写機にかけて見て、証言を集めたテープを聞いた。しかし、「そこには「何」を撮ったのかわからない状態」しかなかった。呉監督はその時の気持ちを次のように言う。

「何を」記録したのかわからない、平和な風景にしか映っていないんです。五十九年ぶりに歴史のメスが当てられたあのどす黒い土が掘り起こされてる一週間にそれが感じた「疑問」は、見事に埋め戻されてしまったのです。その時、私たちは震災の天災のかけで起こされた朝鮮人大虐殺についてほとんど知らないまま、「現場」を部分的に撮影してたことに気づきました。そしてその穴をのぞき、みつめようとすると感じる方が在日二世でもある私と、日本人の彼らとは、スタッフ同士で違いがあることも……。

当初、呉監督が撮った映像には虐殺の「どす黒い」問題が映し出されなかったことがうかがえる。その問題に対して、撮る前に自分たちが虐殺をよく知らないからではなかったか、と考えた。「食い違い」が

生じたことだった。それを呉監督は「日本人」と「在日二世」の違いとしてとらえている。スタッフ間でのこの感情の「食い違い」が何かは、スタッフについて書いている文章には直接書かれていないが、おそらくは、「虐殺は混乱のなかだからしょうがなかった」というような「日本人」の考え方とそれに対する呉監督のいらだちによると思われる。

というのも、第一章でふれたが、一九七五年に、関東大震災五〇周年朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会編集『歴史の真実―関東大震災と朝鮮人虐殺』（現代史出版会）、姜徳相『関東大震災』（中央公論社）が相次いで出版された。そのなかでそれぞれの著作では、震災の混乱がもたらした不幸な事件として虐殺を位置づけることを批判している。前者は、虐殺を「当時の通信、交通の途絶による人心の不安、動揺、流言の発生」のための「あたかも自然発生的な」不幸な事件^{六二}「だったと位置づけることを批判している^{六三}。また後者は「単純に考えれば、混乱のなかに流言があり、人心が動揺し遺憾の点が生じた」とし、「当時の実情から考えてやむをえないことであつた」というような「弁明」^{六三}を批判している。

また、後者は「朝鮮人への迫害虐殺行為は、民衆本来の姿ではなかった」^{六四}とする、前者の日本入研究者の見解に対して「背景に批判している。前者の見解は、「民衆本来の姿ではなかった」背景に

震災下の「混乱」をもちだしているわけではないが、虐殺を一部の
下層階級に限定して、いる点や官憲や軍隊に扇動されたことを強調す
る点で民衆の責任を極端に回避しているような議論にみえる。姜は
それを批判したものである。

事件・亀戸事件・朝鮮人虐殺を同書において三大事件批判（大杉栄
の事件の階級問題であるに對し、朝鮮人虐殺事件は日本官民一体の
民族内階級問題であるに對し、朝鮮人虐殺事件は日本官民一体の
犯罪であり、民衆が動員され直接虐殺に加担した民族的犯罪であ
る）と個別に論じ、民衆が動員され主張した。並列して論じること
は「官憲

の隠蔽工作に加担したと同じになる」と批判して論じていること
は、二著者が批判したような、震災の
混乱がもたらした不幸な事件として虐殺を位置づけている点、姜が
批判したような民衆の責任を回避する考え方だと思われる。しばし
ば、加害者の語りの構造は、「流言のせいだ」、「流言によつて」、虐
殺がおこつたという構造になって、また、流言が虚報ではなく、事
実と

を考へようとする意識がない。また、流言が虚報ではなく、事
実と

して今もつて伝わる意識がない。また、流言が虚報ではなく、事
実と

来「は善であり、虐殺は震災の混乱時の流言のせいだ」、「日本」の「民衆本

おこつた出来事に過ぎないという意識、考え方が反映されている。それにしても、このような意識、考え方は、前述した、朝高生の暴行事件に際しての柴田梵天の「大部分の学生はまじめに勉強に取り組んでいる。在留朝鮮人については、偏見教育をしていない」という言い訳に酷似している。吳監督の映画の舞台となる、旧四ツ木橋周辺の虐殺に関して、前の述の『風よ鳳仙花の歌をはこべ』におさまっている証言には、次のようにある。

『朝鮮人が井戸に毒を投げた』『婦女暴行をしている』『とうとう流言がとんだが、人心が右往左往しているときでデッチ上げかも知れないが……、わからない。気の毒なことをした。善良な朝鮮人も殺されて』^{六六}。

「九月二日には自分の交番に帰った。このときにはもう騒ぎはおさまりがつかない。流言蜚語で住民が極限状態になつてゐるんだ。常識じゃ考えられない状態だ。交番にずっといた相棒の巡査は流言を信じこんでいて、自分で朝鮮人を引っ張つて来る」^{六七}。

「朝鮮人がモスリンの女工さんに絡まったとか、泥棒したとかいうデマが飛んで、朝鮮人狩りみたいなのが始まったんで

す。「中略」手をすつて謝っているけど、皆いきりたってるからやっちゃうんだね」^{六八}。
「とにかく朝鮮人が日本人を惨殺するって風評があったらしいんです。それで日本人を守るために派遣されたらしいんです。ところが岩波「前述の岩波少尉のこと」は士官学校出じゃないんです、兵隊出身の単純な男なんです。それが朝鮮人が日本人を殺すんだって、早合点しちゃって朝鮮人征伐やったんです」^{六九}。

以上の証言には、震災によつて「右往左往している時」（混乱）に、朝鮮人暴動に関する流言によつて、「極限状態」、「常識じゃ考えられない状態」、「皆いきりたつて」、「早合点」していたことが、虐殺の原因としてあげられる。その「流言蜚語」がなぜ生まれたのか、さらににはなぜ信じたのかはほとんど語られておらず、最初の証言は震災の混乱に原因が求められ、最後の証言は経歴（学歴）に原因が求められている。
呉監督の映画『隠された爪跡』にも同じような証言者が登場する。「井戸に毒を入れた」とか、「火をつけた」とかの朝鮮人暴動に関する流言を聞いたことのある「ロケ先で出会った老婦人」が、「朝鮮人というかね、本当に恐ろしい人だなつていうのが子供心に焼きついて

ちやった」と証言している。その人はスタッフが「そういうのはデマでしょ。」と言ったことに対して、「未だにそんなデマだかデマじゃないか知らないよ。だってそのまま大きくなっちゃったもの」とこたえていている。

呉監督によれば、「取材中に会った老人たちの多く」には、「恐い朝鮮人」の流言が「こびりつき、虐殺は良くなかったが、デマの内容は一部には事実であつたと今でも信じている人が驚くほど」いたという。デマを虚報ではなく真実だと受け止めて成長している人の背景には、当時、虐殺が何だったのか問われなかったことがうかがえる。

呉監督はこのような状況に撮影を通じて出くわした。そして、いらいだつていた。それは、新たに取材に出かけた時に冷たく返る反応に對しても感じた。「話してもいいよ」というおじいさんの家に行くと、おばあさんが急にテレビのポリウムを上げてしまった。この時もあつた。しかたなかったという人、語らない人、そのようにして虐殺に向き合えない「日本人」に、いらだつ呉監督がいた。そして、自身も虐殺についてよく「知らない」がゆえにそれをうまく言語化できない、表現できない自分自身にいらだちを覚えていた。しかし、こうした感情の違いに、生まれ育った環境が違ふ、文化が違ふ、民族意識が違ふということに原因を求めてしまうと、永遠

に相容れない可能性がある。「日本人」と「朝鮮人」は違うから「し
ようがない」になつてしまふと、それぞれの解釈を認めるといふよ
りは、放任してしまふ。虐殺は「しろうがなかつた」といふ意見と
大差がなくなつてしまふ。感情の違いは「しろうがない」も虐殺の
忘却になつてしまふ。呉監督は共有を求めた。

一つの穴をめづつて名もなく殺され埋められた側と、虐殺に
加担し、なおそれを隠し続ける側の苦しい立場が食い違つて
民族的感情が熱っぽくむし返されもしました。共に受けた教育の
生きてきた環境が違ふ事は拒めないとしても、私たち両民族の
何世代前に掘られた穴であり、また現在目前に埋められてしま
つた穴の上でお互いに共有すべき歴史がこんなにも生き物の
ように勝手に、現われては死んでしまつて良いのだろうか？

共有すべき、虐殺の問題の本質は何か、呉監督を含めたスタッフ
は「目」と「耳」で材料を集めに関東各地を回つた。荒川土手の虐
殺を少しでも知つてゐる証言者を探して奔走した。呉監督はこの時
が映画作りの「真の出发点」だつたといふ、もしもあの穴から「遺
体が映写されてたらしい」と思ひます」と述べてゐる七三。

第四節 「観念」から「対話」へ

映画『隠された爪跡』が完成するまでに、録音したカセットテープは百本を越し、六mmテープが七〇本余り、フィルムは二万フィート近くを消費した。三ヶ月の卒業制作期限はとくに過ぎ、「楽しみにしていた」就職の面接カードの提出期限も終わっていた。しかし、「誰一人として自己満足できず」、さらに何十回と構成をくり返し、再びアルバイトと撮影に分担してでかけた^{七四}。

その頃、呉監督らスタッフ陣は専門学校ともめている^{七五}。本来、卒業制作は八mmで撮らなければいけなかったようだが、一六mmで撮ったことが学校側に問題にされた。さらに、それ以上に問題にされたのは学校にネガを提出しなればならなかったことである。学校側は、卒業制作の提出期限だから「ネガも含めて学校の財産だから全部渡しなさい」といつてきた。しかし、呉監督は「われわれ、スタッフもそうだしスタッフという仲間もそうだし、私自身もそのまんまの形で学校に、ま、出したくなかったというか。中途半端な形で出したくなかった」。作品が未完成だから「編集するのネガがないと編集できない」と学校にいったら、「未完成とは認めない」、学校の予算と機材を使つたのだからとにかく提出するようになり、学校の予算と機材を使つたのは、アルバイトをやって作つた自負もあり、ほとんど使っていないと反論する。呉監督はその時の様子を

次のように回想する。

私よりも一緒にやってくれた小島君とか、蒲谷君とかね、そういうあのー：若い学生が、逆に彼らが頑張ったんだよね。まあ、「監督」これはそのまんま出すのはやめよう」と。われわれは卒業作品なんてなくたっていいじゃないかと。うん。で、「就職どうするのかわからないから、がんばろう」と言ってくれてねえ。するまでは納得しないから、がんばろう」と言ってくれてねえ。一五人くらいいたのがどんどんどんどん減ってきちゃってね。

結局、呉監督らはネガを含めて、学校に作品を提出しなかった。しかし、卒業証書はもらい卒業した。そして卒業後も撮影と編集をおこなう。

その前後のことだと思われるが、前述したように、呉監督は関東大震災の朝鮮人虐殺を「知らないこと」に気づき、そこから脱却するために学ぶことにした。前述の姜徳相の『関東大震災』などを読みあさり、さらにアポイントメントを取らずに姜のもとを訪ねては直接学んだ。試掘の撮影当初、姜徳相の三大事件批判のようないくつかを、呉監督は知らなかったと思われ。姜の著作を読み、通って学ぶことにより、呉監督は姜の影響を強く受けることになる。

呉監督らは撮影した一年間で、一〇〇人以上の人びとと出会った。そこでは「三大虐殺事件に近い見方が日本人の意識構造に強く根を下し」ていることを感じた。そして「自ら流言蜚語を信じ再生産させ虐殺を犯した、「朝鮮人虐殺」を何か対岸の火のごとく第三者的に観てる自然な平和に」ぶつかつた七八。

この「平和」は、撮影した試掘の様子を呉監督の部屋に集まって、スタッフ一同で観たときの感覚、「何を」記録したのかわからない、平和な風景」と同じだと思われる。呉監督が感じたスタッフとの意識の「食い違い」も含めて、この「第三者的に」虐殺をとらえていく「日本人」に対して、自身の「在日二世」の立場から違和感を抱くようになったからこそ、また悩みを抱えるようになるということは往々にしてあることである。映画製作に際して、呉監督は「観念のかたまりで頭がノイローゼになつて」セリ、「テーマから逃げ出したくなることも度々」ハ。あつたという。この「観念のかたまり」による悩みは、呉監督による文章には明記されていないが、おそらくは、前述したような問題、すなわち、「朝鮮人」と「日本人」の違いはあるかもしれないが、どうすれば、虐殺の問題を共有できるだろう

うか、逃げて出したくなる。時に助けてくれたのは、一緒に制作に取り組んでいた日本人スタッフだったという。呉監督によれば、スタッフに何度かは「なまけものの監督である私を置いて他のスタッフと一緒にシヨン作りにと、ゲートボールや銭湯に出かけて行きました」ハート。また、前述のとおり呉監督は「難聴」のため、聞き取り調査をした時に録音したカセットテープの文字おこしがたいへんだった。当時のカセットテープはマイクが悪く、ノイズもひどかった。それで、
「一生懸命かじりついて」、テープの文字おこしをおこなった。しかし、それで他のスタッフに確認してもらったところ、とんでもないことになっていたので直してもらったハニ。前述した学校とのトラブルもそうだが、日本人のスタッフも製作熱が熱かった。証言者とのコミュニケーションの前のスタッフ間のその関係は、時にはケンカに近い議論もしたと思うが、基本的には良好だったと思われる。呉監督も含めたスタッフたちのコミュニケーション作りが功を奏し、被害者、加害者それぞれの方の立場の人たちが重い口を開いていくことになる。そうした人たちの交流から、呉監督が悩み続けていく

た、「日本人」と「在日二世」の自分とで乖離している虐殺の問題に向き合うようになる。

映画『隠された爪跡』は前述のとおり、曹仁承の震災時のトラウマからはじまる。ストリーリの軸となる曹は震災のおこった一九二三年の一月に渡日するハミ。曹は貧農の子に生まれ、父母を病気で亡くし、下男として奉公に出る。その時に「日本に行けば白いメシが食える」と聞いて、日本にやってきた。曹が荒川の下流にあるバラックで「土方」に従事していたが、なかなか仕事になかった。また、その頃の日本は第一次世界大戦後の不況で日本人労働者の間で労働争議が頻発していたが、朝鮮人は安い労働力として日本人労働者から仕事を奪う存在として、朝鮮人は安い労働力として日本人労働者から仕事を奪う存在として、震災時は自警団によって足を引きずって生きるようになる。

呉監督らが曹のもとで、撮影しはじめたときは、「隔てていた壁」があつたようである。その後、曹が経営する小さなホルモン焼きの店にスタッフ一同で通いつめ、「とびきり、辛いキムチと強いどぶろくを飲み、店を手伝う」なかで「壁」が少しづつとりはらわれていった。呉監督は曹の印象として、「あまり怒りを表面に出さず」、「不自由な足で、常連客とともに競馬を楽しみ、住民と共に元気に一歩

一步歯をくいしばって散歩するその姿には、苦しさを切り抜けてきた人だけがある。つやと力強さがあふれて、いたう。曹前述べたように、呉監督が取材のなかで最も印象的だったのが、曹仁承だった。呉監督は、曹が日本の植民地支配によって故郷をおわ、それで日本に来て、関東大震災にあい虐殺され、その「やさしさと力強さ」に感動する。曹の受けた困難は、呉監督、自身が受ける差別に投影され、曹のひたむきさが自身も負けずに生きていくという気持ちにさせた。それは「日本人」といかに虐殺の問題を共有できるか、一九八四年」というドキュメンタリー映画も作っている。

（一方で、加害者側の「壁」はどうだろうか。前述したように、スタッフたちはゲートボールや銭湯でのつきあいとおして、震災の体験者たちとコミュニケーション「隠された爪跡」に登場する証言者は「半年以上もおつきあいをしてもらった仲の良いいさん、おばあさんで、す」という。呉監督は映画『隠された爪跡』の前で「やさしさと力強さ」がない時にしやべるのでは感情が違い、自分がある「と言葉のあやが変わってしまふ。人から聞いたとか、見たことがある」とおつきあ

いをして、カメラの前で直接語って頂くことを心がけて」作った八四。
呉監督は映画製作をおして、証言者に「対話」を求めた。呉監督
は次のようにいう。

老人たちと私たちの間には、年代の違い、歴史の深さ、人生、
民族の違いがはかりきれないほどありますが、常に対話の中で
何かを考え、何かを学び発見し、自分なりのテンポで「真実」
に接近して行こうとするきずなを築けたと思います。

若者として私たちが学ぶ機会のなかつた過去の民衆の歴史
を、本や教育で覚えた観念ではなく、生の証言から共に確かめ
あうこの対話は、常に私たちの映画のスタイルとなつて自然な
映像になったと、思います。そうしますと、表情の一つひとつ
言葉の一言一言に、その人の長い人生ばかりでなく六十年とい
う歴史の空白がひだとなつて私たちのカメラに切迫しまし
た。
八五

呉監督らスタッフは、当然のことだが「おじいさん、おばあさん」
たちと、単純にグートボール仲間として仲良くなりたいわけではな
い。基本的にはカメラに虐殺の話をしてもらいたいわけである。証
言者がカメラに向ける話から、スタッフたちは内容だけではなく、証

れた人びと——関東大震災と朝鮮人』（青木書店）が出版される。実行
 委員（一九七八年に結成）はその名の通り、千葉県の虐殺の調
 査と追悼活動を先駆的にこなってきた。その調査によつて千葉県
 の現・船橋市・習志野市・八千代市などを中心に虐殺について新し
 い事実がわかつてきた（くわしくは次章）。映画『払い下げられた朝
 鮮人』はこの実行委員会の活動と深く関係している。
 千葉県では一九二三年九月三日、四日に軍隊・自警団の虐殺がお
 こなわれており、なかでも九月四日の船橋（現在の天沼公園付近）
 での自警団による虐殺はすさまじく、司法省調査によれば犠牲者の
 数は三八名^{ハ六}、船橋警察署巡查部長であつた人の回想によれば五
 三名^{ハ七}だつた^{ハ七}。この船橋の虐殺は震災時の新聞でも多く取り上げら
 れてゐるが、実行委員会が明らかにした重要な点はこの後におこ
 った虐殺についてである。
 治安当局は、朝鮮人の暴動は虚報であることに気づき、さらに暴
 徒化する自警団を鎮静化させるために事態の收拾をはかうとした。
 船橋では九月六日と九日の二度にわたり、関東戒厳司令部が「総テ
 ノ鮮人が悪い企テヲシテ居ル様ニ思フノハ大マチガヒデアル此ナ
 噂ニアヤマラレテ之ニ暴行ヲ加ヘタリシテ自ラ罪人」にならな
 いといふ「注意」ビラをまいてゐる^{ハ八}。それ以降船橋では虐殺の
 はおこなわれていない。各警察署や軍隊に「保護」された朝鮮人の

多くは習志野収容所に収容され、公には虐殺はおさまったかにみえた。しかし、収容された朝鮮人が九月七日以降に周辺村落の軍隊によって村民に渡されて虐殺される。実行委員会が明らかにした、高津、大和田新田、萱田上、萱田下（いずれも現・千葉県八千代市）の虐殺である。実行委員会は、この軍隊が習志野収容所周辺の村落に朝鮮人を渡すことを「払い下げ」と表現し、呉監督の映画のタイトルとなる。

映画『払い下げられた朝鮮人』（一九八六年）は習志野収容所周辺の虐殺とその近くにある騎兵連隊の虐殺が中心にえがかれている。呉監督によれば、制作された時期について、「第一作が完成した三年後に第二作にとりかかったハルといっており、一九八五年に製作されたと思われる。

呉監督の姿勢は、前作から「流言蜚語」がどのようなように発生して、どのような経過をたどって虐殺に到ったのか、植民地支配前後から積み重ねられた九月一日以前からの潜在的な「流言蜚語」があったものではなにか、こういう問いに「第三者の言葉ではなく、直接に体験された人たちにカメラに向かった」と語ってもらったこと（「対話」）をモットーにしていた。

前作と『払い下げられた朝鮮人』との違いは、虐殺に関する証言

者の立場において、具体的な虐殺とその加害者（ないし、加害地域）が近いというところである。そもそも実行委員会の『いわれなく殺された人びと』には、聞き取り調査によって知られざる虐殺を明らかにした成果が多く記されている。それは、まだ体験者がいるということとであり、実行委員会が調査する以前から加害の地域でひっそりと追悼をおこなっている点から、加害の記憶が地域には漂っているというくらいのことである。「第三者の言葉」ではない言葉を求める人、虐殺を身近くに体験した人と「対話」がしたくなるのは当然である。萱田の虐殺について証言した君塚国治の長回し映像である。以下、萱田の虐殺に登場する君塚の話の一部引用しよう。

朝鮮（人）をもらった時はねえ、警防団でもらいに行つて、それからそのお寺へもらつて来て、お互いに皆が協議した結果、まあ何しろ、殺すのにもらつて来たんだからね。どういうふうにしたらいのか、というのでその朝鮮（人）は自分が連れて歩いたんだ。あの従弟が来て、従弟は東京にいてヤクザもんだからね。朝鮮（人）の二人や三人はビクともしない。ほんとうにヤクザのその腕っぷしを、つまり連れて歩

かして、それから、まあそれも酒好きだから、この朝鮮（人）にも飲ませろ、と言うので、酒買って飲ませ飲ませて、その自分の従弟だけどずいーぶん説明して「お前たちはもう、この世にいても長く生きている訳にはいかねえんだから……飲みたかったら、オヤジがいくらでも酒買って飲ませっからいくらでも飲め！」と初めは毒だと思つて飲まなかつたけど、従弟がぐいぐいと飲ましたらまいった！たちまち飲んじゃつてえさあ、それから又、一升買ってやつて二升、二升飲ました。

えー、それからまあ早い話が警防団でどうしようかという、協議をして何したつて殺すのにもらつて来たからね。どういう方法にしたらよいかと、で自分にも相談かけつから自分が相談して、どういう風になつて死んだ方がいいかつて聞くと「父ちゃん、〇〇に「ラクに？」殺してくれ」つて言うんだね。「じゃあ、刃で首つ玉切つた方がいいのか？」つて言うのと「そうじゃねえよ」つて言つたけど。「で、どうすんだ？」つていつたから「目隠しして鉄ぼうでぶつてくれ」と、ほんで今度は鉄ぼうでぶつてくれなくて、鉄ぼうでぶつたもんだつて自分の鉄ぼう使ひもんにならないうしよ、イヤー！困つちやつてさあ、それから仕方ないから頼んで、その鉄ぼうの代金は部落で払うから、当人の言うとうりにしてやつてくんねえかつてわけで、自分で頼ん

で、部落のものに頼んで、そういうわけならつうの、あんだま
あ、その人にその人は鉄ぼう、別だから頼んで、ほんだから、こ
う棒つらおっ立て置いて、三人で一人一人鉄ぼうでぶつたら
よ。穴ももう六尺の五尺か、六尺の三尺の穴掘って、五尺も掘
ってんだから撃って穴んなかへ落っこちた。九

村人が「長く生きている訳にはいかねえ」といったり、「どうい
う風になつて死んだ方がいいか」と聞く。「殺すのにもらつて来た」こ
とがさも当たり前か、状況がそこからうかがえる。それに対して「鉄
ぼうでぶつてくれ」とこたえる朝鮮人。地震以降で軍隊や自警団の
朝鮮人虐殺を見聞きして、もう生きられないことを悟って、あきら
め、この映像にのびて、君塚がカメラに向かつてたんと話すその
姿と内容のギャップに驚かされる。それは、当時の状況を話す姿が、
映像を観るものにとつては普通の人が、現在の状況から理解し難い状
況を語ることで、観るものは愕然とさせられる。
この驚きは、カメラに向かつて長々しやべることにも関係してい
る。自身を抱える忘れたいようなトラウマについてなら、そう長々

しやべることは非常に困難だ。自身が認める罪なら語らないかもしれない。軍隊に押しつけられてたなら、責任を押しつけて吐き捨てるように言うかも知れない。内容は、そう長々しゃべられることなのか、君塚はそうではない。その状況は当時、当たり前のことなのかと観ているものは感じずにはいられないのである。君塚は映画のなかで再登場し、次のように語る。

軍隊はね、早い話あの暴れてしようねえのよこしたんだよ。暴れてしようがねえのをね。だからそういうゴロ助をよこしたんだからさあ。ま、でもこの萱田は自分がほら割合に親切にしたもんだから、あんたよう、無理な殺し方も何もしねえんだよ、暴れてしようねえのをこの警防団にくれてよこしたんだから、よそのあれに聞くと、えらい殺し方をしたものもあるらしいよ。歩いて現場を案内する。――

と墓まいり行ってんだよ。ちゃんと墓まいりしてんだよ。だからその、悪いことしてたわけじゃねえ、だから、ともかくこれ誰が悪いことしたかわかんねえ。

：九二

この君塚による語りは、その前のシーンとうって変わって調子が

悪い。悪いことをやつたからと、前作の『隠された爪跡』にもあつたような虐殺の原因を流言に求めているし、しかもそれがいまだに信じられてゐる。さらに、よその地域よりもましだといつて心に残る罪意識をやわらげてゐる。前作の証言と合わせてはじめて、君塚もそのためだろう。つまり、前述の証言と合せてはじめて、君塚もトラウマを抱えていたことがわかるのである。

なお、君塚国治の証言はこの映画だけではなく、一九七七年一月におこなつた大竹米子（実行委員会）らによる聞き取り調査がある。それは『関東大震災と朝鮮人―船橋市とその周辺で―』資料編第一集（一九七八年五月）におさめられている。調査した大竹によれば、「埋めた場所はよくわからないといひながらも、自分から線香をもつて、私たちを案内してくれた」という九三。

後年、大竹は君塚のことを次のように語つた。「おじいさんが、子どもにだから話してあげたい」と大竹は当時習志野四中の教員で生徒を連れて聞き取り調査をした。でもね、なかなか話せないんですね、虐殺現場は「はっきり「ここだ」なんてなかなか言えなくつてね。でも「この辺だよ」なんて、だんだんだんだん本当らしい話になつてきたという。語ることも現場を伝えるのにもかなり躊躇していたことがわかる九四。

映画『払い下げられた朝鮮人』でもえがかれるが、君塚が証言し

た萱田下の虐殺では三人の朝鮮人が犠牲になつてゐる。その犠牲者が埋められた共同墓地が住宅公団によつて宅地整理される。それにとりなつて君塚は区の委員会に改葬を申し入れ、六〇年ぶりに犠牲者の遺骨が発掘される。その遺骨は長福寺におさめられた九五。君塚は前もつて実行委員会に遺骨の発掘日時について知らせなかつた。大竹が発掘の様子を聞きに行く、君塚は「埋めた時と同じ格好で出てきたよ」と言つた。九六。先にたんと話した、話すことが簡単だからそのように話したのではなく、むしろ困難だからこそ、自然な様子で言うに話したのではなく、むしろ困難だからこそ、自然な様子で言うが、聞いた話もふくめて、君塚には、自身の主體的に虐殺に加担してゐたという記憶があり、それを呉監督の『払い下げられた朝鮮人』の証言シーンでは見事に引き出してゐる。

第五節 「対話」の可能性

映画『隠された爪跡』は、初めての試写会で、開映が一時間も遅れたにもかかわらず入場者はぞくぞくとつめかけ、百人程度のイス席の倍以上の人がきた^{九七}。また、二カ月足らずで四六回の上映を終え、自主映画としては異例の反響をよんだ^{九八}。呉監督はその頃のインタビュで、「とりあえず一年間ぐらいは上映を地道にやりながら、そこで出てくる反応とか感想をもとにして、自分にまた何ができるか考えていきたいね。いつも疑問から出発だと思^{九九}うから」と答えている。呉監督にとつて映画を上映することは、「出てくる反応とか感想」を引き受け、そこから考え、新しく疑問をもつことにつながる一つの「対話」だと思われる。

映画の上映がはじまると、各地の上映会場に、あれほど「証言を拒んだ」、「カメラを直視することをきらった」、「知り合いの老人が、家族を連れて見に来てくれた」と述べる^{一〇〇}。また、一番うれしかったと語るのが、「市民団体だとか、運動だとかしたことのないごく平凡な主婦が電話してくれまして上映したいと。お金を集めてもらって、カンパでと。それで、札幌まで呼んでくれた」ことだった^{一〇一}。この時のことは、一九八四年四月二五日の『北海道新聞』の記事に掲載されている。「穏やかに語りたい朝鮮人虐殺の重さ」というタイトルで、「石狩管内広島町の主婦」により、「二十六日に札

幌市教育文化会館で自主上映される」ことが宣伝される。その記事には以下のように記されている。

藤倉さんがこの映画のことを知ったのは昨年九月。たまたま買ったのがきつかけだが、同じころ行きつけの焼き肉店主から「朝鮮人です」と打ち明けられるというこゝろもあった。「これまでこうした問題に特に関心があったわけでも、自主上映の経験があつたわけでもない」という藤倉さんだが、東京に住む呉監督と連絡を取り、道内での初上映を手掛けることにした。準備を進める間、多くの在日朝鮮人にも会い「自分の中にもまだまだ偏見が」と気付いたともいう。「事実そのものは重くとも、映画自体は重苦しいものではなく、わかりやすくできています。多くの人に見てもらいたい」と藤倉さん。

知らない人が、呉監督の作品から新たに虐殺の問題を知って、問いがはじめる。これも「対話」の一つである。呉監督らスタッフ間の「対話」、スタッフと虐殺に関して証言する人たちとの「対話」、そして作品と観衆との「対話」、それをおして虐殺の本質、「真実」とは何かと考え続けていく。それが呉監督における、虐殺の記憶を

継承する。この方法だと思われる。このような姿勢は、二作品とも一貫している。観衆に、映画という媒体によって生まれる緊張も、朝鮮人『は前述のとおり、君塚のたんとした、長々とした話を「在日二世」である呉監督自身はどのようかという聞いて、在日朝鮮人の「だろ」とか「私は想像する。次に上映会場において、在日朝鮮人のようないかにこの映像によって生まれる緊張が映画だからこそ観ている。この場で感じやすい。緊張は、私自身が「日本人」であること意識せざるを得ないナシヨナリスティックな感情による。それが良いか悪いから犠牲者になつた「朝鮮人」への民族の記憶を想像せざるを得ないというところで、呉監督が抱える民族意識からくる、虐殺の調査に対する逡巡を感じさせる文章がある。

震災当時の人がまだ生きている、軍隊や自警団の中で、加害者の側にあつた人々がまだ生きている今、新旧を含む住民の多くが関東大震災という全体像と朝鮮人虐殺の深刻さをまだ理

解できていないので、今発掘すると住民反発がおこってしまう、だからもっともつと朝鮮の歴史の勉強をする時間が必要だし、その場所をそのままの状態に残すことの方が大事だという意見も一部にあるようです。同じ日本で虐殺された朝鮮人の遺体発掘とそのあり方をめぐって日本人の中にも非常に対照的であり様々な考え方があることを知りました。私は在日二世の人として、どちらが良いとか、どちらをやってくれとは何も言えません。ただ一日でも早く雑草の下で永眠できぬ人人の被虐殺史を公けに調査発表し、六十年も行方不明の肉親を故郷でまっている遺族の気持ちの一部の人ではなく多くの人に素直に伝わってもらいたいと願います。一〇二

二作目の『払い下げられた朝鮮人』には、虐殺がおきた高津にある観音寺に、韓国の文化人・言論人・宗教家によるチャリティー募金によって寄進された鐘樓の製作（一九八五年）がえがかれている。そのことに関して次のように述べている。

「鐘樓は『民族的な立場でいえば、一日も早く掘り起こしてお墓を作って下さい』という願いがこめられているんです。私自身としてもこの現場に出会いますと自分の手で掘り起こ

したいという衝動にかられることがあります。しかし最近はお客観的に諦めというよりは、それをどのようにに日本の民衆の側が、日本の行政や政府がどのようにに対処するか見守る義務がある、と思うんです。少しもどかしい気分もするんですが、それに対しては声高に叫ぶよりも、現実に民衆の中で起こったことですから、民衆はどのようににけじめをつけ、お墓を作るのかを見守りたいと思います。一〇三

この二つの監督の語りからは、自身が強く民族意識を持つてゐるもの、それを他者に押しつけようとはしていない姿勢がうかがえる。二作のドキュメンタリー映画で、加害者側の「日本人」に語らせることができたのもそのためだと思われる。もちろん自らの手で掘りおこしたい気持ち、墓を作りたい気持ちがある。そのような監督の思いは、映画を観る側は緊張とともに感じさせられる。それは、長回しで撮られた証言者の声を黙って聞いている監督の姿を想像することにおいてである。

勇気ある証言者を目に見えないところで孤立させている現実には、何度も出会いました」という一〇四。この「孤立させている現実」とは、抱う意味だろうか。一作目から監督が学んだことは、「長く辛抱

強くつき合うと老人たちは本当は自ら孤立したいのではなくて、自らしやべりたくてしようがない気持ちがあるのをはつきりと感じ「たことである一〇五。一しやべりたくてしようがない気持ちがある」のに、「若い人々」が「孤立させている」という批判はどういう意味だろうか。それは、マスコミがくれば少しは一緒になつて盛り上がるが、日々のなかでは、じつくり話を聞かない行為、聞こうとしなれる。態度、そうした土壤を形成する社会についての批判であると思われる。また、ここには無理にしゃべらせるといふことも含まれて思ふ。呉監督の「対話」の一つには前述したように相手にしゃべりやすい環境作りが含まれていきなり要点のみを聞いてもそう簡単によい口を開かないし、例えば開いてもそこには虐殺の問題をつきつめるような話を開かない可能性が高いからである。それにより、虐殺の事実が隠蔽される危険も伴う。このような批判には呉監督らスタッフだ、ことだと考えられる。この時の失敗も含まれ、そこから学んだ、聞かないで拒絶することは、呉監督の「対話」に反している。逆に、「若い人々」や、もともと関心がない人で、呉監督の作品を観るということは、呉監督の映画を通して虐殺について考えるようにな

ること「対話」といえるし、「対話」の場を拡大しているともいえる。前述のように関心がなかった「主婦」が自主上映により作品を観てくれたことに對して、呉監督が喜ぶのはそのためだ。観念的に悩んで呉監督は虐殺の本質的な問題を探るにあたって「対話」を継続するために、相手を尊重し発話させるような環境を作りが必要である。呉監督は映画『隠された爪跡』自体が一つの問いだという。

虐殺の悲惨そのものと、生々しさを訴えて告発するだけの映画として終わらせたくない気持ちをお互いにもちました。日本の歴史の中にこんな悲惨なことが隠されたのか？とシヨツクを与えて考え込んでしまうだけの告発映画にだけは……。デマの恐ろしさばかりでなく、流言と虐殺を結びつけてしまったか、恐ろしい偏見と差別を現在でもしつように私たちのどこかに生きてる問題として、しっかりとその根っこを凝視^みめてもらいたいと思ひ、私たち十人の若者が感じた素朴な疑問をそのまま整

の理して構成しました。したがって記録映画というよりは、一つの材料の整理にしかすぎない舌つ足らずな映像です。

『隠された爪跡』の終盤、曹承仁と、もと自警団員が並んで試掘がおこなわれた荒川の堤防を歩く。その自警団員が「なんであんな事したんだろう、誰があんなこと、あんなデマを飛ばしたんだろう」と思っていると言った後、曹が号泣するシーンがある。曹は自警団員の手を取り握りしなから、「本当に泣くのか」と泣きながらいう。六。吳監督はこのシーンで撮影した私たち自身に、淘汰しようにも淘汰できぬ深い傷跡と民衆のいたみと心を奥に教えてくれました。七。吳監督の映画を観た小学生による感想文で、吳監督が「大好きだ」という文章は「朝鮮人が井戸に毒を入れたという噂がたったのなら、私もひょろに陳腐である。この感想文も、曹の号泣している姿を見ると、それでもその陳腐なセリフが心にしみ、程々、当時の命が助かる見込みはわずかでしかなかった。曹は感じた。虐殺に疑問の恐怖を想像させられ、虐殺の狂気に走った

日本の民衆の姿までも想像させられる。
――を構成してきたストーリーとなる、韓国併合から虐殺の流れまで
の植民地支配の歴史が問われる。民衆は支配の論理をどのようにこ
こまで素朴に内包してきたのだろうか。吳監督は流言蜚語を「官民
に虐殺をおこなって来たのだろうか」と。吳監督は流言蜚語を「官民
間」での「キャッチボール」と位置づけている。これは流言蜚
語を受けとり、また放つことで主体的な民衆の責任を問うているこ
とを如実にあらわしている。どちらが先に投げはじめたかを議論す
るのには無意味だろう。そこにはいずれも責任逃れの論理があるから
だ。

『隠された爪跡』のラストシーンは、試掘中の穴が再度映される。
そこで、「この穴の中には、一体何が埋まっていたのだろうか？」と
問われて終わる。――（そういえば、前章の「怪獣使いと少年」も穴
を掘っているシーンで終わった）。吳監督の「対話」として重要な
のは問いつづけていくことである。吳監督は『隠された爪跡』につ
いて次のように語る。

ね、あの映画でいいなかったことのひとつは、六〇年前のことは
ね、両民族が深く関わりあって生まれた事件だから、時代と

もに遠ざかるんじゃない、事件の本質というものをお互いの
ところ、年月とともに近づけていってもらいたいの。そこか
ら今いわれている政治問題とかいうものを考えてくれればい
いなと思ったわけ。――

むすびにかえて

関東大震災下の朝鮮人虐殺に関する二つのドキュメンタリー映画『隠された爪跡』と『払い下げられた朝鮮人』、その監督、呉充功は「在日二世」であり、また幼少の頃から「難聴」をかかえていた。それにより呉監督は日本社会から差別を受ける。呉監督が民族学校に行くようになって「難聴」であるために、差別は解消されない。また、「在日二世」であるがゆえに、言語の問題から「在日一世」のような強烈な民族意識を共有できないでいた。こうしたことにより呉監督は鬱屈した感情をかかえるようになるが、その鬱屈をはきだそうと詩を書くようになる。その表現方法がやがて朝鮮人虐殺ドキュメンタリー映画に変わった。

本章で論じたように、呉監督の問題関心は、当時の体験者からの取材を通じて感じたように、虐殺の原因となる流言蜚語がなぜ発生したのか、信じられたへ信じられつづけているのかという問いである。そして、流言蜚語が生まれるような差別の構造が関東大震災以前から存在していたのではな

いか、それはどうすれば、のりこえられるのかという問いに拡大していく。そのように虐殺を問いつづける行為は「対話」をとおして生まれた。日本人スタッフとの「対話」から、差別に対する認識の違いがわ

かり、それを、民族意識をこえて考えるにはどうすればいいのかを考える。試掘の時の証言者との「対話」から感じる虐殺の無関心、逃避、忘却。虐殺の問題の根深さを感じる。その後たくさんの歴史の本を読んで考えるが、歴史的な植民地支配と被支配の関係性、それによる民族の対立がわかってくると、いつそう差別の強固さを感じ、頭で考えれば考えるほど、未来を想像することに絶望していく。そのような「観念」にとらわれていく時に出会った、曹仁承との「対話」。曹が話す生死の境界をさまようような震災体験に驚愕する。そのような体験をして肉体的な外傷と心的外傷を背負っているにもかかわらず、生きていくたくましさも感じる。一方で直接殺したわけではないが、虐殺現場にいた加害者の君塚国治からは「対話」によって、心的外傷とともに民衆の虐殺の主體的な責任がうかんでくる。映画の上映における観衆との「対話」からは、それを次世代に伝えるにはどうすればよいかを考えるきっかけになり、またはえがけなかったことや、新しい問題を考えるきっかけにもなる。

このような「対話」によって問いつづけることの重要性が、呉監督の作品には反映されている。呉監督の作品から、観衆は何度も虐殺とは何かを考えさせられるし、他者への想像力をかきたてさせられる。そこに呉監督の作品の魅力があるがそのような安易に答えを求めない作品をつくる背景としては、呉監督自身が受けてきた差別

の重層性があったからだと思われ。日本にいて受ける差別、民族の学校にいても受ける差別から、呉監督は安全なところはどこにもないということを感じる。いろいろ悩ましながら自作と人との「対話」、熱い体験を通じて他者を尊重しながら思われる。となければならないという。ことに到達したのではないかと思われる。

私としては朝鮮人側の立場からだけではなく、私も日本に生きてきましたし、これから日本人と共に生きて考えて、日本に永住するつもりでおりますので、日本人と力をあわせて何ができるか、それに力を入れて映像に表していきたいと思っております。――

第四章・註

- 一 旧四ツ木橋周辺の虐殺や当時の遺骨発掘に関しては、関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会『風よ 鳳仙花の歌をはこべ』（教育史料出版会、一九九二年）にくわしい。
- 二 習志野收容所周辺の虐殺に関しては、千葉県における関東大震災朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会『いわれなく殺された人びと―関東大震災と朝鮮人―』（青木書店、一九八三年）にくわしい。
- 三 大震災と朝鮮人『（青木書店、一九八三年）にくわしい。
- 四 三平連／ジャテック、最後の密出国作戦の回想』（作品社、二〇〇七年）。
- 五 松田政男・高橋武智編集『評論 ゆきゆきて、神軍』（倒語社、一九八八年）、一三五頁。
- 六 高橋による『ゆきゆきて、神軍』の批判は、同前、一四二頁。
- 七 『シヨアル』の解説と評価は、同前、一四三頁。
- 八 同前、一四四頁。
- 九 同前、一四五頁。
- 一〇 作品を上映する会がおこなわれた。その時に寄せられた言葉。『S a i』。
- 一一 〇号へ一般社団法人朝鮮人虐殺の記録を次世代に『S a i』。
- 一二 事務所、二〇一三年一月六日におこなったインタビュー（以下、引用が二〇一四年一月六日と記された場合はこの日のインタビューを指す）。

227

七二	七一	七〇	六九	六八	六七	六六	同様	六五	六四	違	改訂	一五	六三	六二	六一	六〇	五九	五八	五七	五六	五五	六七
前掲	前掲	前掲	同前	同前	同前	前掲	。前掲	前掲	前掲	はな	版で	頁同	姜徳	前掲	前掲	前掲	試掘	前掲	前掲	前掲	前掲	。前掲
『S a i』	『日本』	『隠れた教育』	『一四五頁』	『一四五頁』	『一九二頁』	『風よ鳳仙』	『関東大震災・虐殺の記憶』	『関東大震災・虐殺の記憶』	『関東大震災・虐殺の記憶』	『二〇三年』	『増補改訂版』	『中央公論社』	『一〇〇三年』	『歴史』	『日本』	『S u n』	『残ったもの』	『新し』	『日本』	『S u n』	『P o w e r』	『S u n』
七〇号	八四頁	一四三頁	一四三頁	一四三頁	一四三頁	一四三頁	二八二頁	二八二頁	二八二頁	二八二頁	二八二頁	二八二頁	二八二頁	一九八四	一九八四	一九八四	一九八四	一九八四	一九八四	一九八四	一九八四	一九八四
四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁	四六頁
四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁	四七頁

九二	同前、一九二〇頁。
九三	千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員
会、	『歴史教育者協議会船舶支那と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員
共編	『関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員
(一)	『一九七八年五月、朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員
九四	田中正敬・専修大学関東大震災史研究会編『地域に学ぶ関東大
震災	『千葉県における朝鮮人虐殺その解明・追悼はいかになされた
か』	『日本経済評論社、二〇一二年、五〇、五一頁。二〇頁。
九五	前掲『払い下げられた朝鮮人採録シナリオ』、二〇頁。
九六	前掲『地域に学ぶ関東大震災』、五二頁。
九七	前掲『Sun Power』一九八三年一月二月号、七五頁。
九八	前掲『新しい世代』一九八三年一月二月号、七五頁。
九九	同前、『一〇七頁。』一九八三年一月二月号、七五頁。
一〇〇	前掲『日本の教育』一九八四年、一三九頁。
一〇一	前掲『インタビュー』一九八四年、一三八頁。
一〇二	前掲『日本の教育』一九八四年、一三八頁。
一〇三	前掲『くくりつ』一九八四年、一三八頁。
一〇四	前掲『日本の教育』一九八四年、一三八頁。
一〇五	同前、『日本の教育』一九八四年、一三八頁。
一〇六	前掲『隠された爪跡』採録シナリオ、六三頁。
一〇七	前掲『日本の教育』一九八四年、一三八頁。
一〇八	前掲『くくりつ』一九八四年、一三八頁。
一〇九	同前、『日本の教育』一九八四年、一三八頁。

—	—	—
—	—	—
二	一	〇
前	前	前
掲	掲	掲
『	『	『
く	新	隠
り	し	さ
っ	い	れ
ぶ	世	た
』	代	爪
一	』、	跡
八	一	採
号	〇	録
、	七	シ
八	頁。	ナ
頁		リ
。		オ
		』、
		六
		四
		頁
		。

第五章 千葉県における朝鮮人虐殺の調査と追悼

はじめに

本章は「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会」（以下、実行委員会と略）の活動について、特に一九八三年以降の活動を中心に考察する。前章でもふれたが実行委員会はその名の通り千葉県における朝鮮人虐殺の実態の実証的研究と、その犠牲者に対する追悼をおこなってきた。一九八三年に出版された、実行委員会による『いわれなく殺された人びと——関東大震災と朝鮮人』（青木書店）には、当時の実証研究の一つの到達点として、それまでとりくんできた活動の成果が記されている。実行委員会のメンバーは、市役所職員、中等・高等学校教員、「主婦」などで構成されており、その多様な立場から、それまでの研究では明らかにされていなかった虐殺の事実をひも解いた。

そのなかでも重要な事件の一つとして、軍隊による下げ渡し（殺）があげられる。関東大震災下、中国人や朝鮮人は「陸軍支那人收容所」（以下、習志野收容所と略）に「保護」を名目に收容されるが、その後軍隊が習志野收容所内の一部の朝鮮人を周辺の村落に下げ渡し、住民に殺害させた。震災直後から朝鮮人の暴動というデマをひ

ろめ、虐殺に加担していた政府・軍隊が、その影響下でおこなわれ、た自警団による虐殺の鎮静化をおこなうのは、千葉県（船橋）で確認できるのは九月六日以降である。しかし、習志野收容所周の村落に下げ渡し殺害させたのは七日以降の出来事だった。習志野收容所周辺の村所周辺の虐殺は、現在のところ、高津、大和田新田、萱田上、萱田下の四つの地域（いずれも現・千葉県八千代市）でおこなわれたことが聞き取り調査などから明らかにしている。

津の虐殺は住民から日記が提供されたこと、中心にとりあげる。何人の人が虐殺されたか、日記が提供されたこと、いっ、どこで、何人さされた人びと』が出版されて以降、その犠牲者の遺骨の発掘と、慰霊碑を建立するための活動をおこなって、その道のはな加害のな加害の記憶を本質的には共有することができない。そのなかで、加害の地域の記憶を本質的には共有することができない。そのなかで、加害の害の地域の記憶を本質的には共有することができない。そのなかで、加害の害の二つは実現する。本章で明らかにするのはその過程である。そこからはどうすれば、加害の記憶にせまられるかを論じていきたい。

第一節 なぎの原の虐殺と実行委員会

一九二三年九月一日、現在の千葉県八千代市に位置する高津は、どかな村落だった。正午近くに地震がおきたが、そしてその後何回か続いたが、のどかだった。この頃の高津地区は米作のほか、サツマイモの苗を栽培して東北地方に出荷したり、養豚をおこなったりして生活していた。当時のことが記されている「高津の住人の日記」の作者は、九月一日の午前中に近所に将棋を指しに行き、午後二時頃に帰宅しては、豚が子を産んでいたの世話をしてい。少し遅い昼食をとった後また、将棋を指しに行った。地震による火災で東京の方から紙片木片が飛んでくるもので、昼頃まで寝ていた。九月二日、昨晚遅くまで将棋を指していたので、昼頃まで寝ていた。おきてはまた将棋を指しに行った。九月三日の夜に「東京大火不逞鮮人の暴動警戒を要する趣」が役場から通知された。在郷軍人、青年団で自警団が形成され警戒にあたる。四日には「村中集会」があり、要所要所に警戒線をはり村の安全を守ることに決定された。「鉄砲刀何れも武器持参」が決まる。日記の作者は九月五日、六日の間、三人で東京へ行き震災の様子を見、「死屍」や「焼跡」を見てから帰るが、帰る途中にいろいろなところで、作者自身も自警団に調べられた。高津に帰ると、ここも「非常の警戒振り」だった。「昼夜男子一人

残らず出払ひにて警戒して居る。作者も自警団に参加する。六日の夜中に、発砲騒動がおこる。村人のなかで暴れ出したものがいた。で、区長が家まで送り届けるが、区長が帰る途中に送った村人が鉄砲をもつて追いかけてきた。そこにたまたま通りかかった村人がいかつ、区長を追いかけてきた人物が発砲してしまふ。幸いにして通りかかった村人は無事だった。以下九月七日、九日にかけての日記を一部引用しよう。

七日「中略」皆勞れて居るので一寝入りずつやる。午后四時頃、バラック「習志野収容所のこと」から鮮人を呉れるから取りに來いと知らせが有ったとて急に集合させ、主望者^{マウ}に受取りに行つて貰ふ事にした。「中略」夜中に鮮人一五人貰ひ各区に配当し（中略）と共同して三人引受、お寺の庭に置き番をして居る。八日「中略」又鮮人を貰ひに行く九時頃に至り二人貰つて来る。都合五人（中略）「穴を掘り座せて首を切る事に決定。（中略）穴の中に入れて埋め（て）仕舞ふ。皆勞れたらしく皆其処此処に寝て居る。夜になると又各持場の警戒線に付く。九日 今日から日中は、一八人で警戒し、夜は全部出動する事

になる。皆非常に勞れて何処でもゴロゴロ寝て居る。(中略)
夜又全部出動一二時過ぎ又鮮人一人貰つて来たと知らせ有る。
之れは直に前の側に穴を掘つて有るので連れて行つて提灯の
明りで、切る。「以下略」

日記には、その後の警戒が和らいでいき、日常生活に戻っていく
様子が記されている。一〇日、「日中の警戒も廃し夜丈各庭」で「保
安組合」が警戒することに決まる。一一日、豚小屋をつくる。朝鮮
人暴動に関して、「だんだん風聞もなくなる」。一二日、夜、自分の
家の周りの警戒をおこなう。警戒してきた人たちも「あきて来たら
しい」。一三日、「保安組合員集会、警戒中止と決る」。一四日、「朝
から集会のフレが来た。「警戒における？」會計の相談で有る」。一
五日、「今日は全員の慰労会」。一六日、「豚小屋の中を三人でタ、キ
にする少し残る」。

引用した日記にあるとおり、九月七日に陸軍の習志野收容所から
朝鮮人を「取りに來い」と知らせが来て、高津では三人連れて帰る。
八日にさらに二人連れてきて、計五人を殺害する。九日には一人連
れてきて同じ場所で殺した。この地域では六人の朝鮮人が、なぎの
原とよばれる共有地にて虐殺された。前述のとおり、ここを含めた
四つの地域で同様の虐殺がおきたことがわかつているが、他の地域

三年 研究を参照して『いわれなく殺された人びと』が出版される一九八
 会 版の結成前後から実行委員会が『いわれなく殺された人びと』を出
 の 記事を読んだ人から提供された。引用した「高津の住人の日記」はそ
 聞 鮮人虐殺「八千代でもあった！」「千葉日報」にて「関東大震災時の朝
 鮮 治。前章参照」月には萱田の住民から同地域の虐殺の目撃者（君塚
 となつて活動していた。「そのパンフレットが船橋市の「主婦」が中心
 探る！」に生徒たちがパンフレット「大和田の朝鮮人虐殺の事実をし
 て、一九七六年の夏に大和田新田の虐殺を研究会で聞き取り調査をし
 一足」の活動によって、解明の端を發することになる^四。
 發 足 学校で教員をしていた時に發足させた「郷土史研究会」（一九七二年
 学 校 会 この習志野收容所周辺の軍隊の下げ渡しによる虐殺は、実行委員
 会 の 大 竹 米 子 が、実行委員会が結成される以前、習志野市立第四中
 に 関 しては聞き取り調査によつて明らかにされた。

委員長：高橋益雄（日朝協会船橋支部、船橋市立高根中学校教員）
事務局長：鈴木淑弘（船橋史談会会員、船橋市職員）
常任委員：石井良一（鎌ヶ谷自然と文化財を守る会、鎌ヶ谷市市会議員）

議員）

今村隆文（歴教協船橋支部、船橋市小学校教員）

大竹米子（歴教協習志野・八千代支部、習志野市中学校教員）

教員）

平形千恵子（歴教協船橋支部、船橋学園女子高教員）

吉川清（千葉県自治体問題研究所、船橋市職員）

川崎英美（三山歴史サークル、第二会実行委員会より）

西沢文子（三山歴史サークル、同右）
六

実行委員会の各メンバーは結成以前から調査活動をしてきた。それを四つに分けると、①日本と朝鮮の友好運動からの調査研究、②千葉県歴史教育者協議会（以下、歴教協と略）市川、船橋、習志野、八千代支部の教員による調査研究、③労働農民運動史研究からの調査研究、④海軍東京無線電信所船橋送信所（以下、船橋送信所と略）などの地域史研究からの調査研究となる。それぞれの活動は次のとおりである。

①は、日朝協会朝鮮人犠牲者問題特別委員会『本庄・船橋調査報

告』(一九六三年)などが出され、おもに船橋の虐殺について調査した。特に船橋の丸山という地域では朝鮮人を助けたことが証言から明らかになった。実行委員会の初代委員長である高橋益雄は、日朝協会のメンバーでもあり、船橋での虐殺事件の調査や犠牲者の追悼をよびかけた。

②は、一九七四年八月の歴教協兵庫大会での高橋益雄による報告「関東大震災時の朝鮮人虐殺について」を契機に船橋市で調査をはじめた。一九七四年九月には歴教協船橋支部にて「船橋における朝鮮人虐殺の問題のほりおこし」を研究テーマに決定することが決まり、平形千恵子、今村隆文、木村誠、三橋ひさ子などが聞き取り調査をおこなっている。その成果としてガリ版刷りの『関東大震災と朝鮮人虐殺』(船橋歴教協、一九七六年)がある。なお、その頃の問題関心には前章でもふれたが、当時の民族学校の生徒への暴行事件がある。

また船橋以外では、前述の大竹米子(歴教協習志野・八千代支部)による「郷土史研究会」の活動が一九七六年以降おこなわれている。さらに、大竹とは別に歴教協市川支部の長友脩は、『八千代市の歴史』(八千代市編さん委員会、一九七八年)の市史編纂事業として、同じ頃に八千代市の聞き取り調査をしていた。

③は、鎌ヶ谷市市議会議員の石井良一が、小作争議に関する地域

史を調査していた。ある日突然、日頃から親しくしていた久保野茂次により日記を提供される。久保野は震災時の軍隊の行動、野戦重砲兵第一連隊の一等兵であり、日記には震災時の軍隊の行動、軍隊・自警団による虐殺、王希天事件について記されていた。石井はその日記の公開に助力し、また自身も王希天事件を調べることになった。その石井と高橋益雄は知り合いだった。また、同じ船橋の職員である。一九四七年から図書館・市役所などにつとめながら、一九六四年、一九六六、七一年には市職員組合の委員長として問題研究。そのなかで労働運動、平和運動に關わり、千葉県自治問題研究所から小松七郎の創設にも参加している。その千葉県自治問題研究年がみられた。その秋に『千葉県民主運動史（戦前編）』（一九七七）でみた体験談を話した。出版記念会がおこなわれ、小松は虐殺を間近でみた。郷土史の発掘をおこなっていた船橋史談会のメンバーである。鈴木淑弘が一九七一年に「無線塔と関東大震災（一）」（六）を発表し、船橋送信所からの流言や船橋の朝鮮人虐殺などを論じている。また、川崎英美、西沢文子、三山サークルという歴史を学ぶ「主婦サークル」で活動しており、一九七八年に習志野騎兵連隊に所属していた人への聞き取り調査をおこなって、軍隊による虐殺を

明ら 以上 にか した。それぞれが調査、研究をおこなつていたが、四つの
 カテゴリに完全に分れる調査、研究をおこなつていたが、四つの
 りがあつた。例えば、高橋益雄①にも所属するが、つな
 石井良一も交流があつた。④の鈴木淑弘②にも所属している。③の
 ④の三山サークルは②の大きな人とのネットワークを通じてい
 る。実行委員会はこのような人とのネットワークを通じてい
 される。一九七七年秋に前述の小松七郎の著書の出版記念会がおこな
 れる。そこでは小松の体験談のほか、平形千恵子が虐殺から救つた
 丸山の人がびとと話をした。歴教協船舶支部が作った『関東震災と
 朝鮮人』が回覧され、評判を得るが残部がないため増刷すること
 決まる。増刷に際し、『関東震災と朝鮮人』のほか、各人・グル
 ープがやっている調査の成果を盛りこむこととなり、増補するかた
 ちで『関東震災と朝鮮人』―船舶市とその周辺で―資料編第一
 集（一九七八年五月、朝鮮人以下、第一集と略）が編まれる。この編集の
 過程が実行委員会の結集につながつた。前述のとおり一九七八年六
 月に実行委員会が結成された。前述の大きく報道され、『第一集』も増刷
 される。その後、新たに聞き取り調査の成果をふまえた『第一集』も増刷

244

が寄せられた。『千葉史学』第四号（一九八四年四月）では中里裕司によつて新刊紹介として同書がとりあげられている。そこでは、遠山茂樹が一九八一年の自由民権百年全国集会に向けたアピールとして語つた、研究基盤の拡大（遠山の言葉では「生活的研究者の」の拡大）を引きながら、「自由民権研究以外でも地域に根ざした活動によつて掘りおこされるべき過去がまだ多いことを本書は知らせてくれる」と紹介されていた。さらに「本書は関東大震災と朝鮮人の虐殺に関する、その細かな具体的史実を豊富に発掘した貴重な成果である。そして、その成果は地域の人々のもつ感覚を大切にした、と評価している。一九八一年の自由民権百年全国集会では多くの市民的な地域研究者を組織し、参加者数も膨大であつたが、それを引っぱつていた当時の自由民権運動研究は、民権派と民衆が一体となり明治政府に抵抗したという構図での運動のとらえ方であつた。そこでえがかれる戦う民衆に對して、集会に参加する者たちの多くは自己を同一化するしかできなかったらう。当事者ではない者たちが関東大震災の朝鮮人虐殺という歴史的な事件に向きあつた場合、虐殺の主体（加害者）に同一化することは、当然ながら困難である。よつて、虐殺を研究する加

害者の外部に立つものたちは、基本的には事件の「真相」を明らかにする。会が「根ざした」地域は、加害者ないしは加害者に近い人たちが、世代以降の近親者など、がいる地域だった。実行委員会の会員が、その加害の地域の近くに住んでいたとしても、外部の存在になるのでは、ない。努力を必要とした。構築し、同じ方向に向かうということは、並々ならぬ。動は、大きくわけて二つの目標が掲げられた。朝鮮人犠牲者の遺骨発掘と慰霊碑建立である。前述した高津の虐殺について、場所は、被害者の人数もわかっている。その地域の遺骨発掘を成しとげたのは、一九八八年九月二十四日であるが、その後に出された最初の会報「いしぶみ」第二十七号（一九九八年一月二十四日）では、「実行委員会の二十年間」をふりかえって、「はじめの十年間は主に調査活動を、あと十五年間は追悼・慰霊を主に、下半世紀が経ちました」と自己の活動を位置づけている。以下、実行委員会の活動のうち一つの柱、「追悼・慰霊」活動、なかでも遺骨発掘と慰霊碑建立にいたる過程をみていく。しかしその二つを達成するには、実行委員会がふりかえったように、本当に長い歳月を必要とした。

第二節 出版後の反響と課題

『いわれなく殺された人びと』は一九八三年九月一日、関東大震災からちょうど六〇周年目に出版された。同書には大きな反響があり、朝日・毎日・読売等の各新聞やラジオなどで紹介された。実行委員会事務局になって、平形千恵子の自宅には電話や手紙によってさまざまな反響が届けられた。そのなかには、本の入手方法をたずねる人もいれば、震災時の自己の体験を語る人もいた。また、一九七四年に結成された歴史を学ぶ主婦サークル―三山サークルは、一九八二年に実行委員会の「大竹米子とともにスライド『埋もれかけた記憶を―関東大震災と朝鮮人虐殺』を作成した」が、そのスライドを秋の高校の文化祭で上映したいと依頼を受けている。『鐘楼―がある。この建立の経緯として、まず同年三月七日に、韓国国際児童青少年演劇協会理事長の金義卿と民俗劇研究所の沈雨晟が、震災を素材にした台本を作成するたに、劇団「風の子」の神田成子の案内で高津観音寺となぎの原を訪ねた。なぎの原には「為関東大震災朝鮮人犠牲者諸霊菩提塔」と書かれた数本の塔婆が立って、いた。金義卿と沈雨晟の二人が帰国した後の五月、観音寺住職宛に手紙がきた。そこには、なぎの原での犠牲者を慰霊するために鐘と

鐘樓を建てたいと記されていた。

韓 國に帰国した二人は、学者、文化人、宗教家らと話しあい、「關東大震災韓國人犠牲者慰靈の鐘を贈る會」を発足させた。ソウル駅などの街頭募金、小中高大各学校での募金によって資金を集めて建立にいたった。建立される様子は、前章でとりあげた吳充功監督の映画『払い下げられた朝鮮人』にもえがかれている。「普化鐘樓」の建立文には「韓國十三の市・道の土を集め、韓國の瓦と木材、そして韓國式丹青で真心を込めて建てた」とあり、「觀音寺の二代に亘る住職一三が慰靈の塔婆を立て、また多くの市民グループが自國の恥部を掘り起こす作業をすることにより、失われた歴史は再び明らかにされた」と評価している。そして「現代の韓國人はその暗い歴史を憎みはしても、今日の日本や日本人を咎めたくはない。むしろ歴史を正視し、その歴史の前に謙虚な日本の友人にありがたいとさえ思う」と記されている。

『いわれなく殺された人びと』の刊行により關東大震災下の虐殺に関する実態究明について、実行委員会の活動は広く知られることになった。その後、実行委員会は、自分たちの成果を歴史教育者協議會全国大会等の各研究会・集会で報告していく。そうすることで、貴重なアドバースや虐殺に関する新しい証言を得て、実態究明における活動もより進展するようになる。

特に一九九三年八月二十八日、三〇日にかけて東京の江東区総合区
 民センターを中心会場として開催された関東大震災七〇周年記念集
 会^{一四}は、大学教員や様々な地域の市民研究者等が一堂に会した集
 会だった。実行委員会もこの集会に参加したが、集会では実行委員
 会が調査していた地域に係する、萱田上へ千葉県八千代市の事
 件について目撃した人が証言した。その人が序章でふれた震災当時
 小学四年生だった八木ヶ谷妙子である^{一五}。
 八木ヶ谷の証言から実行委員会は萱田上の虐殺について知ること
 ができたように、この集会の意義は、新資料の発見や各地域の市民
 研究者による掘りおこしからの朝鮮人・中国人虐殺の調査研究が深ま
 り、それがさまざまな立場の研究者们・共有一九六六年から翌年にか
 た、そうした研究たちの交流により、一九九六年から翌年にか
 て松尾章一監修による『関東大震災』政府陸海軍関係史料ⅠⅡⅢ
 巻へ日本経済評論社が出版される。そのⅠ巻は実行委員会の「大竹
 米子と平形千恵子が編集を担当した。そのⅠ巻は実行委員会の「大竹
 しかし、実行委員会は自分たちのフィールドで実態究明の他にや
 るべき課題が残っていた。一九八四年八月二三日刊行の実行委員
 会報『いしぶみ』第一五号には『いれなく殺された人びと』発刊
 から一年として、実行委員会の活動に「あたらたな決意」が六点記さ
 れている。

一、私たちは会員や協力者の職場や地域で小集会を組織し、『いわれなく殺された人びと』を中心に学習会、懇談会を開きます。
二、八千代市高津に眠る関東大震災朝鮮人犠牲者追悼慰霊祭を高津区民のみなさんと今年も開きます。
三、私たちは来年度高津犠牲者の遺体発掘調査実行委員会の結成を目途に準備をすすめていきます。
四、船橋市営馬込霊園での関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊祭に積極的に参加を呼びかけます。
五、同じ目的を持って各地で活動している諸団体と情報を交換し連携を深めます。
六、機関紙「いしぶみ」を発行します。

このなかで三の「遺骨発掘」(それに伴う慰霊碑建立)は、最も大きな課題であった。一九八七年の七月下旬、なぎの原における朝鮮人犠牲者の遺骨発掘と慰霊碑建立の計画をすすめるため、実行委員会、高津観音寺住職、高津区特別委員会(旧住民の慶弔を担当する碑建立実行委員会)によって「関東大震災朝鮮人犠牲者高津遺骨収集・慰霊碑建立実行委員会」(以下、遺骨収集・慰霊碑建立委員会と略)が結成された。当時の実行委員会代表である高橋益雄はその趣旨を次の

ように説明する。

この事件（千葉県で起きた朝鮮人虐殺）が全国に明らかにされたのは、千葉県に於ける関東大震災朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会編『いわれなく殺された人びと』の出版によりですが、殺害現場がほぼ確定できる高津ナギの原の区有地では、以前から地元区民、観音寺住職の手で施餓鬼供養が毎年行われてきていました。数年前からは、同実行委員会主催、地元共催の慰霊祭として毎年九月初旬に開かれ現在に至っておりますが、この間、両者間で現場の発掘調査と慰霊碑建立の話し合いが進められてきました。その結果、来年迎える関東大震災六十五周年までに、発掘調査を完了し、慰霊碑を建立することを目標に、「関東大震災朝鮮人犠牲者高津遺骨収集・慰霊碑建立実行委員会」を結成、活動を開始いたしました。

私たちは、繰り返し返してはならない日本歴史の汚点として関東大震災をとらえ、その真実の追求と犠牲者の追悼を行ってきました。この度の計画もその一環として取り上げ、多くの方々の御理解、御協力をお願いする次第です。一六

遺骨収集・慰霊碑建立委員会の目標は、関東大震災六五周年まで、

すなわち一九八八年までに発掘調査を完了し、慰霊碑を建立することだった。しかし、それは会が発足してから一年ばかりしか猶予がないことをあらわしている。現在からしてみるといささか早急な目標にも思えるが、以前から実行委員会には慰霊碑を建立する意志があった。

『いわれなく殺された人びと』が出版される前年の一九八二年八月三十一日の『朝日新聞』（千葉県版）には実行委員会の平形千恵子のインタビューに慰霊碑を建てて、犠牲者を追悼したい。それまでは、私たちと一緒に慰霊碑を建てて、犠牲者を追悼したい。それまでは、私たちの運動に終わりは無いように思えますね」と述べている。また、『いわれなく殺された人びと』出版直後の「第一回 関東大震災朝鮮人犠牲者追悼慰霊祭」では、高橋益雄が「みなさんの遺体を発掘し、手厚く葬りみなさんの霊を安じたいと思います」一七と弔辞を述べている。

関東大震災から六五周年をむかえる頃は、当時の事件の関係者が相次いで亡くなっている。一九八四年八月四日、曹仁承が亡くなつた。八三歳だった。曹は一九七八年に実行委員会から大竹、平形が聞き取り調査をした相手だった。前章でもふれたように曹は震災時、荒川河川敷におよび東京の寺島警察署の朝鮮人虐殺を目撃し、自身も命の危険にさらされたこと、またその後に習志野収容所に収

容されたことを証言した被害者であった。
久保野は前述の通り王希天事件に関する日記も八四歳で亡くなった。
一九七二年に鎌ヶ谷に住む石井良一に見せ、その後公開に踏み切つた。
また、久保野とは別に王希天殺害について記録した日記があり、
それは当時久保野と同じ連隊の第三中隊長だった遠藤三郎による日
記だった。実行委員会は横浜の遠藤宅への訪問を考えていたが、そ
の矢先（一九八四年一月一日）に遠藤三郎は九一歳で亡くなる

一九。久保野と遠藤の記録は加害者側の記録として貴重だった。

関東大震災の当事者世代が亡くなると、聞き取り調査による虐殺
の掘りおこしは難しくなってくる。虐殺の実態について新しい研究
成果が出ると注目されるが、その延長には忘却という問題がときま
まう。実行委員会が遺骨発掘や慰霊碑建立を早期に達成しようとし
た。当時は、ちようどそのような時代にさしかかった頃である。慰
霊碑は、その名の通り死者の霊を慰めるものだが、それとは
別に事件を後世に伝える機能をもっている。実行委員会が課題とし
た、遺骨発掘と慰霊碑建立は「繰り返してはならない」歴史を同時
代の人たちと二世代の人たちに伝えるために中心となっていた。力し

た高橋益雄（初代実行委員会委員長）が、一九八八年三月六日の早朝に急逝した。その直後の会報である『いしぶみ』第一九号（一九八八年四月一日）は「高橋益雄先生追悼号」である。追悼号の一面には三月九日に江戸川台東自治会館でおこなった告別式における、吉川清（次の実行委員会委員長）による弔辞が掲載されている。そこには次のように記されている。「八千代市高津に慰霊碑建立」の課題は、今なお遅々として展望が開かれたとは言えない状況にあり、失った私達は悲嘆に暮れ、右往左往を繰り返すことになるかもしれない。とせん。しかし嘆き悲しむことの繰り返しは、先生の本意に背くことを私達は承知しています。とし、これからの活動に「最善の努力を払う」ことを約束した。西沢文子、平形千恵子と実行委員会のメンバーによる追悼文が掲載されている。それぞれの強いシヨツクの状況を「羅針盤を失った小舟が逍遙する姿」と表現したが、実行委員会の状況の報告は、次号『いしぶみ』第二〇号（一九八八年八月二五日）が出された後から、一九九三年に出された第二一号まで五年間の長い空白があった。

といえ、実行委員会は単に悲嘆に暮れていたわけではない。同じ月の二十六日には、香川県から千葉県野田市に來た福田村事件の犠牲者の遺族と町役場職員の間で事件の供養をおこなっている。さらに香川子は合流し、いっしょに事件の供養をおこなっている。さらに香川県から來た二人を船橋馬込霊園に案内もしている。高橋益雄の死によつて、以前から課題としていた「八千代市高津に慰霊碑建立」は、実行委員会にとつて今後の大きな課題であることとをより強く意識させることになった。大竹米子は『高橋益雄先生追悼記念文集』のなかで次のように述べている。

マスさん（高橋益雄のこと）、また私たちに仕事を言い付けておいて。ほんとうに、もう……。それに付けても、私はもう、時間の無駄はできない年なんだと思いますよ。二

第三節 遺骨の発掘

の年、関東大震災から六〇年を経た一九八三年九月、はじめて実行委員会と観音寺住職、高津区特別委員会等で「第一回 関東大震災朝鮮人犠牲者追悼慰霊祭」をなぎの原で開催することになった。以後、毎年九月には欠かさず共同で慰霊祭をおこなってきた。以て慰霊祭は実行委員会と高津区特別委員会との貴重な交流の場になつていた。逆にいえば、両者は容易に立場をとものにすることができない緊張関係が常に内在していた。それは、世代はかわつたとはいえない虐殺をおこなった過去をもつ地域と、虐殺の実態を現在において明らかにし、未来に向かって伝えていこうとするグループとの立場の相違に他ならない。実行委員会では聞き取り調査の時にその相違を自覚していた。『いわれなく殺された人びと』では平形千恵子が、聞き取り調査の様子を次のように語っている。

今もなお、「何かに書くのか」と（地元の住民たちは）警戒し、「古いことだから、すっかり忘れちゃったよ」と忘れられない苦しい表情を見せ、「他の人のほうがよく知っているから」と口をにごす人たちが多い。（虐殺に）かかわり方が深ければ深いほど語れないという面もある。単なる目撃者のほうが語り

やすうといふのが、調査をしていてあらためて感じさせられたことである。遠い昔になつてしまつても心のすみに残つた心の痛みは消えることがなかつたのだらう。二二

「唐殺の記憶は地域において生きていた。前掲の「高津の住人の日記」に登場する唐殺の現場、なぎの原は、大竹米子が調査をはじめたばかりの頃は教えてもらえなかつた。三三。実行委員会の懸案である、高津における朝鮮人犠牲者の遺骨発掘と慰霊碑建立は、実行委員会が高津との合同慰霊祭のたびに話題にし、実行委員会と高津区特別委員会とで実現できるような雰囲気醸成させていく。そして、実行委員会は関東大震災から六五周年の節目の年にそれが実現できないかと模索していた。四日であるが、会発足のための事前打ち合わせを実行委員会のみで七月一二日におこなつてゐる。そこで実行委員会は、慰霊碑建立の時、遺骨収集の時期、発掘の準備、経費の募金、行事計画などを話し合つてゐる。第一回の遺骨収集・慰霊碑建立委員会の会合では、実行委員会、観音寺住職、高津区長等が参加した。立てること、遺骨の発掘は区の役員会の了承を得ておこなうこと、

実務は実行委員会がおこなうことなどを決めた。当初、実行委員会は、みずからがイニシアティブをとりながら、高津区の了解を得て遺骨の発掘と慰霊碑の建立をおこなうことを構想していた。実行委員会は翌年までにそれを目指したが、その課題が容易ではないことは、この後の遺骨収集・慰霊碑建立委員会において思い知らされることになる^{二四}。

第二回の遺骨収集・慰霊碑建立委員会の会合は同年九月六日におこなわれた。その日は高津・なぎの原での第五回合同慰霊祭もおこなわれていた。第二回の会合では、高津区の区役員会はまだおこなわれたいが、区役員の大方は遺骨発掘をおこなう意向であること、関光禪（観音寺住職）から詳しい説明を役員会で聞きたいとのことが高津区側の様子として実行委員会に知らされた。

その他に、役割分担、碑石の見積もり、講演と映画の企画、「やらされた」事件の本質を知ってもらうための企画を高津区の要望に応じた形でおこなうこと、趣意書の草稿、慰霊碑建立募金口座を開く予定などが話し合われた。

ここで実行委員会のいう「やらされた」事件の本質とは、高津の住民による朝鮮人虐殺は「権力によって引き起こされ、軍隊によって彼らの罪悪をカモフラージュし、責任を転嫁するためにつくりだされたものである」^{二五}と虐殺を位置づけている点にある。

第三回の遺骨収集・慰霊碑建立委員会の会合は、同年九月二十八日におこなわれた。その一週間前の九月二一日に高津区役員会がこなわれ、その内容を関光禪が報告した。それによると碑を建てることに異議はないが、それまでの段階で全員の一致を得られなかった。役員会では結論は出ず、当分見送りになったということだった。実行委員会はその報告に驚くが、地元の区役員会の了承を得られない状態なので、遺骨発掘に関する趣意書の配布を見合わせる事になる。

第四回の会合は、同年一〇月二二日におこなわれた。そこでは一月の中旬から一二月の下旬の間で、一度、高津区役員会と実行委員会との交流ができないかと、実行委員会が高津区長に申し入れる。しかし、この交流も実現できなかった。碑を建てる前段階の問題とは、発掘に関して実行委員会は当初提言していた「科学的に掘る」ということである^{二六}。それを高津区役員会では受け入れることができなかった。実行委員会の目指した、関東大震災六五周年（一九八八年）における遺骨発掘と慰霊碑建立は、結局実現しなかった。実行委員会がその実現に可能性を抱いたのは、『いわれなく殺された人びと』の出版における反響の大きさから得た自信があったと考えられる。同書の出版にあたり、実行委員会には並々ならぬ加害地域への配

慮があつた。前述のとおり「高津の住人の日記」も『いわれなく殺された人びと』に所収する際に「何世紀にもわたる村落の絆と、負いあひのなかで決めていた。また、『いわれなく殺された人びと』には、実行委員会の目的は高津の虐殺について「村人の過去をあばいて追及するためではない」とし、「やらされた」虐殺の本質と「虐殺に加わった村人たちもまた、被害者の側面をもっていることを明らかにする」こと、「そのうえで虐殺された人たちを供養すること」だつたと明記している^{二八}。

く 実行委員会が地域住民の心情をくみとりながら記した『いわれなく殺された人びと』は出版にいたる過程で、少なからず地域と実行委員会との距離を近づけた。それは出版後（本の出版は九月一日、慰霊祭は九月一日）の合同慰霊祭の実現という形で端的にあらわれてゐる。慰霊祭では、高津区を代表して江野沢寿は「再びこういう過ちを犯さないことをお誓いいたしまして」と弔辞を読み^{二九}、前節で述べたように高橋益雄も遺骨発掘と慰霊碑建立の悲願を述べていた。

は、しかし、九年後の一九九二年九月五日におこなった合同慰霊祭では、吉川清実行委員会代表が「追悼の辞」のなかで次のように述べ

てゐる。「『いわれなく殺された人びと』は「多くの人に深刻な衝撃

を与え、大きな反響を呼ぶものとなり、この地での慰霊碑建立にも大きな弾みをつけるものと考えられました。が、既に九年を経た今も、関係する方々の最終的な合意を得るに至らぬまま時を過ぎてきてしまわれました^{一三〇}。

『いわれなく殺された人びと』出版後も、実行委員会と加害地域の間には、一定の距離が維持され続けた。実行委員会はあらためて地域における加害の記憶と、立場の相違を認識しなければならなかった。

実行委員会の最初の委員長である高橋益雄が亡くなったのは、第四回の遺骨収集・慰霊碑建立委員会の会合で提言した、一二月までの実行委員会と高津区役員会との交流が実現されないなかで、さて、これからどのようなアプローチで交流をおこなうかという問題を抱えていた時期にあった。

これまで実行委員会を代表として高津区にコミットしていた高橋は、一九八八年の春に高津区の役員の家を回る予定だった^{三一}。一九八八年の『いしぶみ』第二〇号では、地域における歴史認識と実行委員会との差異を再認識した上で、あらためて遺骨発掘と慰霊碑建立へ向けての抱負を高橋は次のように語った。

慰霊祭のたびに犠牲者を悼み、再び過ちを犯すことのないよ

うにと述べられた区民の懺悔の心を、そしてまた、これらの事件を知る多くの日本人の心の傷みを刻む碑の建立でありたいと願うものですが、それはまた、事実を事実として後世に残すことでもあります。長い時間をかけても、大きく広めていきたいと思ひます。今後ともご支援をお願い致します。三二

高橋が亡くなり、遺骨収集・慰霊碑建立委員会が自然消滅三三した後、『いしぶみ』が一九九三年に再刊されるまでの五年間、遺骨発掘と慰霊碑建立に向けて実行委員会がどのような高津区と交流を構築していたか細かく追うのは難しい。「実行委員会の二十五年間」をふりかえった『いしぶみ』第二七号によれば次のように記されている。

八七年から九三年にかけての五年間は、七〇周年に向けて、遺骨收拾と慰霊碑建立の念願が高まった時でした。実行委員会の提案に、まず区民の総意をはかるべく、岩井豊吉区長はじめ長老方がご尽力下さいましたが難しいことでした。在日韓国人の金善玉さんらの同胞への慰霊と村の人々の呵責の荷を軽くしたいという熱い説得もありました。市議会議員であった熊崎守司さんは、当時の仲村「和平」市長と区の役員と実行委員会

をつなぐために奔走してくださいました。その間、岩井次郎現
区長、特別委員長の石井二雄さんらにお骨折りいただきまし
た。九三年八月、市長公室で仲村市長、熊崎氏、関住職、区か
ら元・前区長、石井特別委員長、江野沢貞義氏、鈴木利秋氏ら
七人、在日韓国人として金善玉氏ら二人、実行委員会から吉川
代表ほか三人が参加して話し合いは行われたが、やはり実現は
難しい問題でした。三四

その後、一九九三年から再刊された『いしづみ』をみても、遺骨
発掘と慰霊碑建立における特別な活動、遺骨収集・慰霊碑建立委員
会の設置のようないことはみあたらない。もちろん、実行委員会は遺
骨発掘と慰霊碑建立の悲願を失っていたわけではない。一九九三年
八月二八日、三〇日に東京で開催された関東大震災七〇周年記念集
会では、実行委員会を代表して大竹米子が慰霊碑の建立を「地域の
事業として取り組むことに意義がある」三五と述べている。
民との合同慰霊祭では、吉川清が弔辞に力をおいて「この地に眠る犠牲
者の皆さん、」私ども実行委員会の非力のため、諸般の実行計画、
とりわけ地元の方々の合意を頂いてこの地の遺骨収集を行ない慰霊
碑を建立するという計画が実現の目途を立て得ぬまま遅々としてお

ります。と述べている三六。
吉川の弔辞の語り方は、遺骨発掘と慰霊碑建立が実現できない責
任を自分たち実行委員会の力不足として、虐殺の犠牲者（死者）へ
詫びながら、同時に高津区住民へ計画の実現のために訴えるもので
ある。このように語り方が有効だったのは、実行委員会の代表とし
て、高橋の後を継いだ吉川が、高津区住民とコンタクトをとってい
たからだと思われる。吉川によれば、合同慰霊祭の前には「今年の慰霊祭はどうしよう
かと、打ち合わせはしていたのだけど、それと合わせて市の方に話
しかつ、打ち合わせはして、地元との懇談会を開くとかという形で何らかの
し合ひをするとか、地元との懇談会を開くとかという形で何らかの
ことはやって、いた。また、地域でおこなわれる伝統的な祭りに
に参加したり、区の役員が選挙に立候補して当選した場合、出向い
てお祝いしたりして、日ごろのつきあいを大切にした三八。
掘と慰霊碑建立が、高津区へ足を運び、実行委員会と共同で遺骨発
掘に実を結んだのである。実行委員会の活動への思いを語りながら、
ながら、またある時には実行委員会と高津区が折り合いをなす地
点、時間をかけたのであろう。実行委員会と高津区が折り合いをなす地
一九九八年九月五日、なぎの原で第一六回合同慰霊祭がおこなわ

れた。慰霊祭には地区役員五人が正装で参加し、江野沢隆之（高津の特）別委員会委員長が地元にて発掘の話し合いが進んでいると次のように報告した。

「前略」大震災から七十五年を数える今、当地で事件に関わつた世代は多くが他界され、生活者は次世代に移り、また人口は当時の一〇倍を超すなどの中でまちの姿も一変し、不慮の災害について伝承も風化しつつあります。

件の土地が国有地から高津地区地元住民は、昭和五十六年に事件の土地が国有地から高津地区に委譲されたのを機会に、不幸な出来事に対する区民一同の痛恨の思いを込めて、大震災五十九年目の昭和五十七年、いわれなく犠牲となられた皆様のご冥福を祈ってなぎの原に角塔婆を建立しご供養をさせていただきます。そして、事件より六〇周年の翌昭和五十八年、追悼調査実行委員会の皆様と共同開催となりました第一回慰霊祭に際しましては、当時の江野沢寿区長が地元代表として弔文を捧げ、以後実行委員会の皆様を中心とした慰霊祭にご協力をさせていただきます。いただいてきています。

軍命令は絶対的な權威を持っていた時代の潮流に逆らえず、不幸な事態に関わった過ちを再び引き起こすことのないよう、

私ども次世代の者たちは心に銘じ、いわれなくこの地に生命を失われた諸精霊が安らかな眠りにつかれますよう努力を重ねてまいる所存であります。好むと好まざるとにかかわらず加害の立場に立たされ、苦渋の念にさいなまれ心をいためてきた地元民は、一日も早い問題の解決を願いながらも、残念ながら歴史の重圧によって速やかな解決を押しとどめられて参りました。そして、私どもの努力は時の流れの速さに比べ遅々として皆様方の期待にそうまで至りませんでした。

しかし、そうした中で七十五周年を迎えたいま、真に遅くなりましたが、長年懸案の諸精霊の望郷の思いに応えるべく、遺骨を清浄申し上げ、皆様の祖国から寄贈建立された鐘楼の鐘の音響く観音寺に安置するための合意に到達することができました。報告申し上げます。「後略」 三九

直後の九月二四日、なぎの原にて遺骨発掘作業がおこなわれた。四〇。一部マスコミに扇情的に取り上げられるのを心配して、日程等は非公開で準備が進められた。発掘の費用は「オレたちの問題だから」と高津区で負担した。四一。さらに高津区から発掘の条件として「専門の業者に任せること、記録は取らないこと、立会人はお寺の住職と地域の慶弔委員会」と「実行委員会の数人だけとすること」。

最後にマスコミに公表しないこと」^{四二}が出された。発掘は石材業者の石友工業が請け負うことになったが、作業に参加したのは「若い、三〇代前半ぐらい」の人が中心であり、『いわれなく殺された人びと』を読んだという^{四三}。

当日は心配された夜来の雨も上がり、午前八時、関光禪（観音寺住職）により脱靈式がおこなわれ、続いて発掘作業がはじまった。なぎの原にはブルーシートを幕として張って、周りはみられないようにした。墓標の周辺数十坪をユニボで掘削、最初はなかなか出てこなかったが、一二時くらいに小さな杯などが出てきて、その後犠牲者の骨が出てきた。こぶしの大木から二メートルくらいのところからみつきり、骨は細い根に包まれているようであった。骨は土にかえる直前であったが、大腿骨と顎の一部分の骨が残っていた。夕刻五時には、他に骨が残っていないかを確認し、発掘を終了した。遺骨は洗浄後、容器に納め、観音寺納骨堂へ仮安置された。後年、江野沢隆之は発掘の様子を次のように語った。

発掘に入ったときに、午前中は市役所の用事で、午後になり
ました。私が駆けつけたときまだ掘ってたんで、午後にもお
骨が出たときかな？ 私はすぐく身体の節々が痛くなってお骨を拾
れ？ これはなんだと。まあ、体験ですよね。出てきたお骨を拾

って洗って手を合せて拝んでいるうちに、だんだん節々の痛みが治ってきましてね、高津のこの地に埋まっていた方々の霊が私にね、乗り移ったのかと思いました。

今後とも日韓日朝が明るい陽射しで友好関係ができればと私は思います。毎年供養させていただきますので、みなさんよろしくお願いします。 四四

想
また、実行委員会の大竹米子は遺骨の発掘の様子を次のように回している。

村の役員さんたちはね、怖かったんだと思うけど、ずっと後ろを向いててね、ところがもう出てこないとわかってからこっち向いたんですよ。私と吉川清さんと島田泉（青木書店、『いわれなく殺された人びと』の編集者）さんの三人はね、どうやって出てくるかと穴の中ばかり見ていたんですよ。それで、ご住職（観音寺の住職、関光禪）はね、「あんたたちはじーっと穴見ていたね」って言うんだけど。だって写真撮れないんですからね、自分の目で見るよりないでしょ。

村の中心になった、碑の後ろに名前のある、その方が、五〇代

前半だったんだけど、水で骨洗ってました。ああ、と思ったんですよね。その人にとっては、骨を掘るということは供養だったわけですね。私たちは調査というか、「ああ、こういう違いがあるんだ」って思いました。その方が私の背中をたたいてね、「長い間、追って来た成果があったね、甲斐があったね」って言って下さったんです。とっさに言われて返事ができなかったですね。四五

立場の二人が回想する発掘の光景は、実行委員会と高津区特別委員会の相違をあらわしている。「出てきたお骨を拾って洗って手を合はせ、地域に継承されていた虐殺の記憶からくる傷痕が、遺骨の発掘による洗骨と拝む行為によって、消えていくという地域の贖罪が、かえり。実際に殺害したわけでは無い、後の世代の役員で、もがのり。実際の被害に感覚にとられるほど、地域には一九二三年からつく虐殺の記憶が継承されていた。実行委員会は、そのような光景を目の当たりにすること、あらためて虐殺の歴史的問題の大きさを認識した。遺骨の発掘に、地域のひとと一緒の姿勢を、私たちが意識しつづけてきたのは、地域のひとと一緒に掘って供

るのつう養
加立てすし
害場掘るたい
のとるのが、
問加こが一
題害とで地
と地は番域
し域ないの
ての立いの
と場の考加
らえの違害
るいをて責
こと認いた任
が識す^四とと
でる^六と述と
きのことべ
のでは、現
ない代る。
だろにも自
うも分た
か。なち
。がち行ど

第四節 慰靈碑建立

一九九八年一〇月二日、吉川清と関光禪（観音寺住職）とで、八千代警察署へ訪問した。刑事課担当官に資料（「高津の住人の日記」）を提示し、状況を説明したところ、刑事課と鑑識の警察官六人が高津にきた。警察は発掘現場を確認し、納骨堂に仮安置されていた遺骨の検視をおこなった。監察医によつて日記のとおり六人の遺体であることが確認された。その後、警察署から八千代市長宛に必要な文書が送られる旨の説明があつたので、同日午後、市の窓口である保健福祉課長を訪れ経過を説明、火葬許可書交付を要請した。数日後、関住職に許可書交付の連絡が届き、諸手続きが完了、一〇月一二日船橋の馬込斎場での火葬が決定した。

一〇月一二日、改葬の火葬においては通常、僧侶の読経はおこなわれ、一日が、当日は関光禪の協力で読経をおこなった。火葬終了までの一時間余り、遺骨の発掘をおこなった石友工業の社長が用意した控室で、実行委員会、高津区特別委員会、在日本朝鮮人総聯合会、在日本大韓民国民団等の参加関係者が、それぞれ思いを語りあつた。その内容を一部紹介しよう。

関光禪（観音寺住職）
今回の発掘供養は、区民が会合を開いて、区民全体の意見で実

現しました。長い時間かかって申し訳なかったが、念願の発掘が実現して安堵しています。「中略」今後の事については名前もわからず、北も南もわからないので、観音寺の境内にまつり、長く供養を続けたいと考えています。

金善玉「在日本大韓民国民団」
長い間の皆さんのご苦勞を察します。当時の軍の命令でやったことで仕方がない。地域の皆さんは、今日帰られたら、「なぎの原のことはこれですんだから安心しておやすみ下さい」と、ご先祖に申しあげて下さい。これから、ちょうど金大中大統領が来日して、過去のことは、精算をして互いに仲好くすむという話があったが、互いに心を開いて誠意をもってつきあってもらいたい。その関係をいつまでも壊さないように、今後よろしく協力しあいながらやっていきたい。江野沢議員さんは、八千代市のために貢献されたと思います。

尹東煥（在日本朝鮮人総聯合会）
発掘に携われた皆さん、大変ご苦勞さまでした。発掘を直接お手伝いできたのもよかったと思います。追悼調査実行委員会が発足したころ、千葉にいました。その後、十六年間千葉

を離れていました。追悼調査実行委員会の皆さんは、それ以来
ずっと活動を続けてこられた。江野沢先生、関先生、本当に貴
重な仕事をしてお下さったことに心から感謝します。重い歴史を
しっかりと子供たちにも伝え、歴史に学び、再びこうしたことが
おこらないように真の友好親善をつくっていかねばなら
ないと思います。南の大統領は、戦後の処理は、解決済みとい
ったが、北との戦後処理はされていません。これは、戦後処理
の問題の一つです。歴史の教訓を生かして、新しい朝日関係が
生ずるように、二十一世紀に向けて、二十世紀の残す期間を、
善隣友好に心掛けたと思います。

相沢友夫（石友工業社長）
改葬の業者は、いわれたままにお手伝いするのですが、私ども
は、過去、何千体を扱って来ましたが、今回は、社員で、職人
たちが『いわれなく殺された人びと』を読み合わせ、はじめ
て歴史的な大事業に参加することを選びました。関先生がずつ
と守り続けた仏さまです。普通ですと、そのまま箱に入れ焼骨
するところですが、若い人が本当に丁寧に洗骨してました。
七五年という大変な年月、後世に二度と起こらないように、日
韓、日朝、の友好に役に立てたかと思っっています。この仕事に

参加させていたいただいたことに感謝しています。 四七

そして、江野沢隆之（高津区特別委員会委員長、八千代市議会議員）は「長い間、お待たせしました」と遺骨発掘に時間がかかったことを詫びた後で、「碑を建てるまで、もう少し、待って下さい」と慰霊碑建立の決意を語った^{四八}。その後、火葬した六人の遺骨は三つの骨壺に納められ、観音寺に安置された。一九九九年の春、実行委員会は慰霊碑の石材の選定のために、石友工業の熱心なすすめもあり茨城県真壁に二度、採掘場・加工工程を見学しに行った。慰霊碑建立は間近だった。そして碑文の選定をめぐって実行委員会と、観音寺住職、高津区特別委員会との間で話し合いが繰り返された^{四九}。しかし、今度は慰霊碑に刻む碑文をめぐって実行委員会と高津区住民とで意見の相違が生まれる。実行委員会が作成した碑文の原案を以下引用しよう。

一九二三年（大正一二）年九月一日相模湾を震源地としておきたマグニチュード七・九の大地震は死者行方不明者一四万、家屋焼失四五万、全壊一三万の惨害と流言による社会不安をもたらし、この大災害の中で陸軍習志野練兵場の一角高津廠舎に朝鮮人中国人被災者の収容所が設置された。陸軍は、軍管理の

下にあつたこの收容者の中から指導者と見なされる者を、九月七日、九日、近接の数ヶ所の集落（現八千代市内）に振り分けて「処分」することを命じた。絶対権力をもつ軍の命令を受け、各集落は軍の命令の呪縛に縛られ長い間口を閉ざしてきた。この高津区では事件から半世紀を経た頃から、重い心の傷跡の修復を願つて心ある区民の中で犠牲者の霊を弔い、区・観音寺・実行委員会による慰霊祭が恒例化されこの行為に理を認めた韓国民有志や仏教会から鐘楼と慰霊塔が寄進された。

この地に眠る犠牲者の御霊が明るい陽光に巡り会えるまでに四分の三世紀という長い時を必要とした。二度とこのような悲劇を起こすことの無いよう地区住民はもとより全国各地有志の願いを込めてここに六名の犠牲者慰霊の碑を建立する。

五〇

実行委員会が提案した碑文の原案作成にあたって、平形千恵子は「地域住民は加害者でありながら、軍隊に「取りこい」といわれてやらされたことから、被害者でもある。その事実の経過と軍隊の責任についてだけは碑の裏面に書いて残したいと私たちは強く思つた」と述べる。

実行委員会が作成した原案をもとに、話し合いは三回ほどおこな

われ、その度に修正を施したが、結局、碑文についての高津区からの合意は得られなかった。実行委員会の西沢文子は、高津区住民の反応を次のように述べている。「実行委の原案をたたき台にして、何回も集まって話し合い碑文を検討しました。あるとき、高津の人が、「後世に残る碑文に、軍隊に命じられて殺したことを書かなければいけない」とはわかるけど、やはり、それは書けない」と呟いたのが、いまも私の耳に残っています」^{五二}。

また、平形も「代が変わって当事者の次の世代の人たちから、「それはわかるのだが、やったことにはちがいない」と地域の責任を強く感じる言葉が出てきたと述べている」^{五三}。

結局、碑の文言は表には「関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊の碑」とだけ記されることになった。そして裏面には「高津区特別委員会委員長 江野沢隆之、高津区民一同、高津山観音寺 住職 関光禪、千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会委員長 吉川清」と記されることになった。慰霊碑は高津観音寺の境内の「普化鐘楼」のとなりに建立され、発掘された六人の犠牲者の遺骨が納められた。

一九九九年九月五日、高津観音寺での第一七回合同慰霊祭にて「関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊の碑」の除幕式はおこなわれた。高津なぎの原で合同慰霊祭をおこなうようになってから一六年、遺骨発

掘・慰霊碑建立を実行委員会が高津区へ正式に提案してから一二年、
ようやく慰霊碑は建立された^{五四}。

午後二時、岩井健三（高津区特別委員会副委員長）による開会の
言葉に続き、韓国から送られた梵鐘をついて黙祷。実行委員会およ
び、観音寺住職、高津区特別委員会の三者の代表による除幕、献花
の後、江野沢隆之（高津区特別委員会委員長）、吉川清（実行委員会
代表）の弔辞が読まれた。

開眼供養には関光禪（観音寺住職）を導師に、林了一（正覚院住
職・八千代仏教会会長）、多田博雄（長福寺住職）、関琢磨（観音寺
副住職）が唱和した。その後、李徳満（在日本大韓国民団江戸川
支部）、尹東煥（在日本朝鮮人総聯合会千葉県本部副委員長）、松尾
章一（関東大震災七〇周年記念行事実行委員長）らの弔辞や挨拶が
あった。

除幕式には高津区民をはじめ千葉県内外から八四人が参加した。
以後、合同慰霊祭は高津観音寺の敷地に建立された慰霊碑の前で毎
年おこなわれるようになる。

第五節 その後の活動について

第一章でもふれたが二〇〇三年八月三〇日・三十一日に「関東大震災八〇周年記念集会」が東京都の亀戸文化センターでおこなわれた。七〇周年の記念集会同様、内外問わず、大学教員、地域研究者らが参加しておこなわれた。実行委員会も参加し、代表して平形千恵子が「朝鮮人犠牲者の遺骨掘り起こしと慰霊碑の建立」を報告した。八〇周年の記念集会では歴史学者の山田昭次が「関東大震災と現代―震災時の朝鮮人殺害事件と国家責任・民衆責任」と題して講演をおこなった。山田は、「問題なのは、日本人が建てた碑、ないしは日本人が碑文を書いた碑で、日本人が殺しましたと書いたものはまだひとつもないという現状」であり、「私も日本人ですから、それぞれの地域で民衆が朝鮮人を殺してしまっているから、碑文の筆者も書きづらくなっている。虐殺の主体を明記した碑を建立するように述べた。日本人」による虐殺の主体を明記した碑を建立するように述べた。――第一章参照――^{五六}。

山田の語りの構造は「朝鮮人」を被害者として、「日本人」は加害者であるという二項対立の図式のなかで論じられている。そして、自身を現在の「日本の民衆」のなかに位置づけながら、「自分が殺したと認め」る必要性を主張していることで、当時の虐殺の主体とも自己を同化している。そのなかで、山田は現在の「日本の民衆」の

責任として国家責任を追求することが「日本人」に課せられている（自分にも課している）といい、「日本の民衆が有終の美を為してほしい」と訴える^{五七}。

山田が期待する慰霊碑について、二〇〇九年九月に、「関東大震災時に虐殺された朝鮮人の遺骨を発掘し追悼する会 グループ ほうせんか」による「悼 関東大震災時 韓国・朝鮮人殉難者追悼の碑」が荒川河川敷（東京都墨田区八広）に建立された。建立した市民グループは、当初、行政に河川敷に碑を建立することを認めるようにはたらかかけたが認められなかった。その後、河川敷近くに私有地を取得して自分たちの手で建てた。同碑は日本人が建立し、虐殺の主体と経過を記した初めての碑とされる。

一方、実行委員会の吉川は慰霊碑に碑文がないと、「後で説明の仕様がでない」といい、吉川は何も語られない碑文の解決策として実際に計画していることは、会報の『いしぶみ』や、新たにパンフレットを作成し、観音寺の寺に常置しておくことをあげている^{五八}。吉川は「お寺においておくぶんには地元の方でも反対できないからね」^{五九}と理由を付している。また、ハングルで書いた案内を観音寺に置く^{六〇}、『いわれなく殺された人びと』以後の活動について、「石ではなくて、モノを書いて残す」^{六一}ことなどを検討している。記録に残す作業は、自分たち実行委員会がおこなってきたこと、

明らかにしたことの引き継ぎ（継承）を視野に入れており、現在の
実行委員会の課題として、実行委員会は『関東大震災八五周年
書いて残す』成果として、実行委員会は『関東大震災八五周年
葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会
料集増補訂版』を刊行した。この資料集は実行委員会の会報で
ある『いしぶみ』の創刊号（一九七八年六月二十四日）から第三五号
（二〇〇八年一月二五日）までのを中心にして、集会のビラや、実行委
員会会員による歴教協やその他の研究会でのレポート等をまとめた
ものである。五周年にあたる前年秋に資料集を作成したのだが、どうしても入れ
たい資料が出てきたために再編集したからである。その資料の
なかの一つに、八千代市史編集委員会に対して訂正を要請した文書
がある。二〇〇八年三月一日発行の『八千代市の歴史』（通史編・下巻）
の関東大震災下の虐殺に関する記述に誤りがあることに気づいた実
行委員会は、二〇〇九年三月五日に編集委員会あてに訂正を要請し
た。その文書には次のように記されている。

『八千代市の歴史』は、八千代市が自治体として公に発行さ

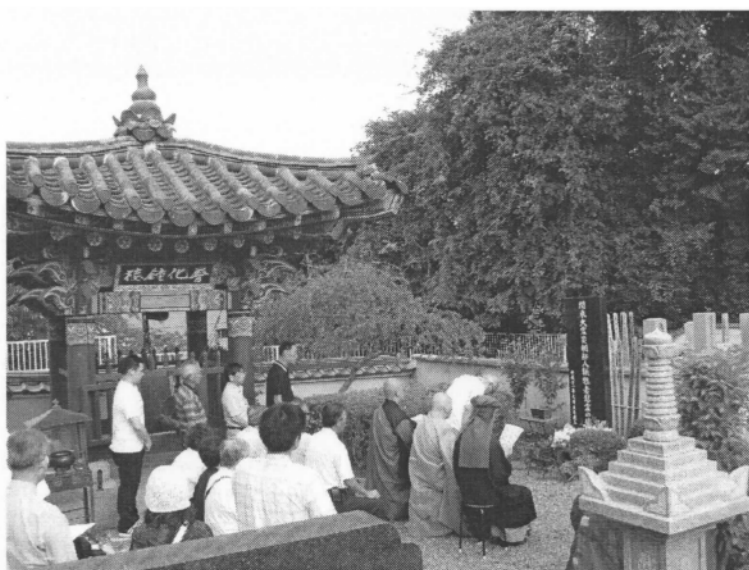
れたものであり、教育現場で教材として、歴史学習の資料として、また専門の研究者にも利用されるものです。韓国・朝鮮など諸外国からも注目されるものと考えられます。八千代市民にとつても、市史に間違った歴史が残ることは困ります。また、「中略」深い心の痛みに長く誠実に取り組んできた関係地域の住民に對しても市史に事実誤認、記述の誤りがあることは許されないことと考えます。ぜひ、正確を期して訂正されることを要請いたします。六三

以上のように述べたうえで、『八千代市の歴史』に誤って記されている高津における虐殺の人数、遺骨発掘の時期など六四の訂正を具体的に説明しながら要請している。ここからも自分たちが明らかに感じられ、また虐殺があつた地域への配慮が読みとれる。大竹米子は、資料集のあとがきで「高津の人びとが、三代にわたって語れなかつた苦悩と、遺体を掘り、改葬し、墓碑を建立するに到るまでの苦闘をこそ、後世に伝えるべきではないでしょうか」六五と述べている。この資料集は、実行委員会の活動を通して、現在まで地域における虐殺の問題を伝えるととも、実行委員会の課題を未来へ向けてどう継承するかを考えるさせられる資料である。

最後に、実行委員会は一九八三年より毎年の合同慰霊祭を欠かしたことはなかった。その原動力として端的に語っている文章がある。二〇〇六年九月一日の船橋馬込霊園、九月二日の荒川河川敷の慰霊祭に参加して、九月九日の高津観音寺の慰霊祭をおこなった平形千恵子の感想である。

平形は「共通して感じたことは、犠牲者に対する追悼・慰霊の行動が、(虐殺を)繰り返さないことはもちろんだが、決して忘れないことにつながり、この問題に関心をもち続けることは、歴史から学んで、学んだことを現在に実行していくことではないかということだった」^{六六}と述べている。

地域との問題に取り組むため、そして関東大震災下の虐殺の問題を後世に伝えるためにおこなわれる高津観音寺の慰霊祭は、実行委員会が長い時間をかけて加害の地域の人たちと建立した慰霊碑の前でおこなわれる。実行委員会は慰霊祭のあと、希望者を募って高津のみならず、大和田新田、萱田下、萱田上の虐殺があった地域を案内し、歴史的問題を語り継いでいる。そこで語られる話は関東大震災下の虐殺の話だけではなく、その後の地域住民の苦悩も含まれて下りる。この慰霊祭は地震のあった九月七日、八、九日、または集まりやす



【高津・観音寺の合同慰霊祭

二〇一一年九月四日小園撮影】

むすびにかえて

本章は、実行委員会の活動について、一九八三年の『いわれなく殺された人びと』発刊後の高津における活動を中心に検討した。大学に在籍する専門家ではなく、多様な市民による地域研究の成果として、『いわれなく殺された人びと』は生まれた。新しく明らかにされた歴史的事実は、聞き取り調査などを通じて地域に根ざす研究スタイルで発見されたことだった。出版後の課題は、虐殺現場がわかつている千葉県八千代市高津なぎの原に眠る、朝鮮人犠牲者の遺骨発掘とその犠牲者を供養しての慰霊碑建立だった。『いわれなく殺された人びと』の出版における大きな反響は、実行委員会の活動の原動力となり、課題の早期解決をめざした。が、実際には長い時間を必要とした。実行委員会のこのために地域は、加害の地域と共同して課題をこなすことであり、そのために地域とのつながりを大切にした。早期解決を目指して、実行委員会と観音寺住職と高津区特別委員会とで構成された遺骨収集・慰霊碑建立委員会は数回の会合をもつて消滅してしまふ。そのときに問題とされたのは、実行委員会が提案した遺骨の発掘における科学的な検証であった。実行委員会はいわれなく殺された人びと』出版後から毎年継続しておこなわれるようになった合同慰霊祭の時に、遺骨発掘と慰霊碑建立の課題を主張

し、引き続き。また、実行委員会の代表である吉川清が地域の行事に参加し、地元の、それとなく、動き、原動力になった。この様な行為が、一九八九年九月二十四日、観音寺住職、高津区特別作業がおこなわれた。専門業者がおこなった。震災時の資料には伝えず、作業の過程をまじり、掘き出した骨を、実行委員会と、発掘参加する、ため、作業の過程をまじり、掘き出した骨を、洗った。高津区役員の発掘行動の差異が、虐殺に對する向き、合点の違いをあらわしている。その翌年の一九九九年九月五日に、関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊碑が建立された。高津区特別委員会と、立場の違いが、あらわになった。実行委員会は、軍隊の責任を最も重要なこととして、虐殺の主体として残すことが、問題になった。この高津区住民の心情を、どのよう

山田昭次は、「日本一人の民衆責任として、国家責任を追究する必

要を訴えている。そのなかで、碑文に虐殺の経過や官憲や自警団の

加害責任を刻むべきだと主張される。山田が問題とする碑の一つに
は実行委員会が建立した「関東大震災朝鮮人犠牲者慰霊の碑」が含
まれる。もともと実行委員会は、前述したように碑文の原案を作成してお
り、山田が述べたような虐殺の主体や経過を記したかった^{六八}。前
述の碑文原案では「絶対権力をもつ軍の命令を受けた各集落は軍の
命令の呪縛に縛られ長い間口を閉ざしてきた」とある。実行委員会
と山田昭次における国家責任を厳しく追及する姿勢は、大きなズレ
はないように思われる。次の「有終の美」にむかう民衆責任が、た
さねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
うの「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
を「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
いう「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
では「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
者「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
部の「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
ない「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
ま「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
った「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
のか「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
という「有終の美」にむかう民衆責任が、たさねたとして、虐殺は「有終の美」にむかう民衆責任が、た
主体的責任を問うはめになるからだ。その意味で、

「それはわかるのだが、やったことにはちがいない」という地域住民の言葉は象徴的である。さらには、外部の者が同じ「日本人」として責任を果たそうと主張しても、加害の地域の記憶は共有されないからだ。客観的な歴史的事実を積み上げて、日本の民衆が朝鮮人虐殺をしてきた、特に軍隊や当時の政府にその責任があるという歴史を学んだとして、そしてその歴史が共有されたとしても、その歴史しかない外部のものと、その歴史をもち、かつ加害の記憶をもつ人とは大きな差がある。その点では同じ「日本人」にはならないのである。直接的加害者ではない人なら問題ないのではないかと、思うかもしれないが、ここではとりあげた高津の場合は、虐殺の記憶が地域において継承されている。それはどういうことかという点で、虐殺をしたという事実が、その地域の生活に何らかの支障をきたす枷になつたのではないかと、思う。第三章でも述べたように、地域に何か不幸がおこると虐殺が想起される。それが「崇り」として客観的な根拠をもたないものとして、地域住民がそのように継承されていること自体が、虐殺の主體的責任を伴った記憶が地域には継承されていくという生き続けている。それが高津の場合だと、外部に語ることも一九九九年まで生き続けている。それが高津の場合だと、外部に語るこ

とができる。記憶が地域には残っているということが虐殺の問題だ
と言え。私は碑には何も書かなければいい、虐殺を語らなければいいとい
っているのではない。実行委員会の吉川は慰霊碑に碑文がないと、
「後で説明の仕様がいない」というが、そのとおりである。私は、地
域の虐殺の記憶を外部の私が共有することはできないが、継承する
ことは可能であり、軍隊の責任を地域の碑に刻むことよりも重要だ
と思っている。そのため、にすべきことは、地域住民が語ることで
きないことをそのまゝ後世に伝えるということである。虐殺によつ
て、加害者がこれだけ長く口を閉ざすことになるという。加害の地
の記憶を継承していくことが、加害の地域でさえもその記憶が失わ
れ、そのような時代に必要になったのである。私が在籍する専修大学
のこのような考えになったのは、私が在籍する専修大学大学院の東
洋近現代史ゼミへ指導教授・田中正敬において、二〇〇七年より
はじまった実行委員会への聞き取り調査による。最初は二回にわた
り実行委員会に案内され、千葉県における関東大震災の虐殺の現
や慰霊碑などの史跡を回った。その時に感じたのは、前述したよう
な実行委員会と加害の地域の人の交流と緊張関係である。その後
にゼミ内で議論され、実行委員会を歴史化しようという動きになつ
た。実行委員会のフィールドワークの魅力はまさに、加害の地

域とのつながりをとおして、そこから得た知識だけである。ここから
の記憶を点検した。大きい。学ぶべき点は大い。解説を、実行委員会が
私はその共同研究で、実行委員会に聞き取り調査をおこなって、
毎年、この地の慰霊祭に参加して、慰霊祭後の実行委員会が
案内する。フィードバックは、多くは語ることができない。歴史を聞き取り調査に
域を考へる。う。い。で。非。常。に。重。要。だ。と。思。つ。て。い。る。こ。と。が。で。き。な。い。実。行。委。員
会はこの地に、い。て。あ。ま。り。文。字。に。さ。れ。な。い。歴。史。を。聞。き。取。り。調。査。に
よ。つ。て。ひ。も。解。い。て。き。た。本。章。で。述。べ。た。よ。う。に。歴。史。の。問。題。は。関。東。大。震
災害の下に限らず、加害の地域において、その後も生き延びてきた。フィード
ド。ワ。ー。に。お。け。る。現。在。に。つ。な。が。る。歴。史。と。問。題。に。し。ば。し。ば。歴。史。の。間。は、
域。に。お。け。る。文。字。で。書。か。れ。る。歴。史。と。問。題。に。し。ば。し。ば。歴。史。の。間。は、
大きな違いがあり、後者の歴史には、決さねない。歴史の間の地
の記憶が含まれていて、そのよう。な。記。憶。に。は、ま。た。あ。ら。た。め。て。話。を。聞
くの。し。か。手。段。が。な。い。の。で。あ。る。を。知。る。た。め。に。は、ま。た。あ。ら。た。め。て。話。を。聞

第五章・註

一 研究史的な位置づけとしては、ノ・ジュウ「関東大震災朝鮮人虐殺研究の二つの流れについて」アカデミックなアプロ「チと運動学的アプロ「チ」田中正敬・専修大学関東大震災史研究会編『地域に学ぶ関東大震災——千葉県における朝鮮人虐殺その解明・追悼はいかにされたか』（日本経済評論社、二〇一二年）。

二 千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会『いわれなく殺された人びと——関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼調査実行委員会』（青木書店、一九八三年）。

三 「高津の住人の日記」に關しては、同前、六〇九頁に一部掲載。

四 以下の収容所周辺の虐殺が明らかになる過程は、田中正敬「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会の活動」前掲『地域に学ぶ関東大震災』、一四〇〜一四三頁。

五 同前、一三五〜一六三頁。以下、本節は田中の研究による。

六 同前、一三七頁、表5—2。

七 久保野茂次の日記、通称「久保野日記」は、関東大震災五〇周年朝鮮人犠牲者追悼行事実行委員会・調査委員会編『歴史の真実——関東大震災と朝鮮人』として一部所収されている。また、「久保野日記」の公刊にあつては『いわれなく殺された人びと』の九三頁。

八 『いしづみ』第一四号（一九八四年一月一日）。

報 『いしづみ』第一四号（一九八四年一月一日）。

九三山サークルについては、前掲「千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会」の活動Ⅰ「『地域に学ぶ関東大震災』のほかに、稲垣裕章「朝鮮人虐殺の究明・追悼への取り組み」三山歴史サークルの西沢文子氏への聞き取り記録」「『専修史学』第四七号（二〇〇九年一月）に「くわしい」第一六号（一九八五年八月一〇日）の経緯は、同前、および同第二九号（二〇〇三年七月二五日）の建立文は鐘楼の内側に掲げられており、目にする事ができる。この二代とは関博道、関光禪のことである。

委員編『この歴史永遠に忘れず』（日本経済評論社、一九九四年）。委員八木ケ谷妙子の証言は、同前、八七、九二頁。実行委員会が八木ケ谷と直接コンタクトをとったのは、実際に集会の少し前であり、この年の六月一日に大竹米子、西沢文子が八木ケ谷妙子の案で、萱田上の虐殺現場跡を歩いている。

一六。実行委員会報『いしぶみ』第一八号（一九八七年九月一日）。一七。実行委員会報『いしぶみ』第一四号（一九八四年一月一日）。一八。曹の証言記録は、千葉県における関東大震災と朝鮮人犠牲者追悼・調査実行委員会、千葉県歴史教育者協議会、千葉県自治体問題

研究 所船橋支所共編『関東大震災と朝鮮人』資料編第二集（一九七
 九年）に収録。また、前掲『いわれなく殺された人びと』、二一、二
 七頁にも紹介されている。
 一、九 前掲『いしづみ』第一六号。遠藤三郎の震災時の日記は、宮武
 剛『將軍の遺言』遠藤三郎日記（毎日新聞社、一九八六年）で一部
 紹介されている。
 二〇 実行委員会報『いしづみ』第一九号（一九八八年四月一四
 日）。
 二一 『高橋益雄先生追悼記念文集』（私家版、出版発起人代表・
 前田昭雄、一九八九年）、一三八、一三九頁。
 二二 前掲『いしづみ』、一六四頁。
 二三 前掲『いしづみ』、一六四頁。
 二四 前掲『いしづみ』、一六四頁。
 の活動 八月二五日は、朝鮮人犠牲者遺骨収集・慰霊碑建立実行委員会
 八年八月二五日は、朝鮮人犠牲者遺骨収集・慰霊碑建立実行委員会
 二五 前掲『いしづみ』、一三〇頁。
 二六 前掲『いしづみ』、一三〇頁。
 二七 前掲『いしづみ』、一三〇頁。
 二八 前掲『いしづみ』、一三〇頁。
 二九 前掲『いしづみ』、一三〇頁。
 三〇 実行委員会報『いしづみ』第二七号（一九九八年一月二四
 日）。
 三〇 実行委員会報『いしづみ』第二七号（一九九八年一月二四
 日）。

293

五 四	五 三	七 月	五 二	五 一	一 七	性 者	会 編	五 〇	号	四 九	四 八	四 七	四 六	四 五	日	四 四	四 三	四 二	四 一	年	関 東
『	第 二	第 一	前 掲	一 行	前 掲	八 頁	追 悼	千 葉	真 壁	同 前	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	。実 行	前 掲	同 前	前 掲	八 九	大 震	
八 号	七 回	『	『	『	『	『	『	『	の	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	災	
。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	。合 同	
慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	
祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	祭 ・	
慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	慰 霊	
碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	碑 除	
に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	に つ	
い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	い て	
は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	は、	
前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	前 掲	
『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	『	
い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	い し ぶ	
み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	み	

295

震災『その成果が、前掲『地域に学ぶ関東大震災』である。

・ 結論

本論文は、これまでの歴史からこの東大震災下における虐殺研究が見落とされ、おこなった。その虐殺の記憶は日本近代史に組み込まれず、被害の地域やマイノリティ・コミュニティの記憶としてほそと加えられ、生き延びた。その生きた記憶はどのように継承されてきたかを問われる。終章では今後、虐殺の記憶はどのように継承され得るかを問う。第一章は戦後歴史学が関東大震災の虐殺研究から何を明らかにした。関東大震災の虐殺研究は、何を明らかにした。関東大震災の虐殺研究は、何を明らかにした。関東大震災の虐殺研究は、何を明らかにした。

八〇周年の頃になると当時の体験者が亡くなつてきて、聞き取り調査が困難な時代が到来する。それにもない、これまで研究を引張つてきた、専門の歴史研究者や地域研究者は実態研究より、虐殺の国家責任を追及するようになる。私が八〇周年の記念集會に参加して思ったことは、若い研究者が少ないという年代であつた。それは、実態レベルで明らかにできることが困難な時代。その直面して、若手の研究者が生まれなかつたことに責任まで研究の枠組みが變つていないことに原因があると考えられる。

その枠組みとは基本的に加害者Ⅱ「日本人」／被害者Ⅱ「朝鮮人」という構図で、朝鮮人虐殺の研究が特化してしまつたことが一つある。また二つめに、上部構造の「官憲」／下部構造「民衆」という階級間で、上から下に向かつて虐殺の罪や責任が重／軽と分類された点もあげられる。本論文はこれらの二項対立を批判して、この枠組みによつてえがけられて虐殺された「ろう者」や「沖繩人」の問題である。「に間違えられて虐殺された「ろう者」や「沖繩人」の問題である。第二章では、いわゆる聴覚障害者である、ろう者が虐殺の犠牲になつたことの実態研究をおこなつた。きつかけになつたのは『わが

指のオーケストラ』というタイトルの漫画であるが、それが参考にして、資料は、震災から五〇周年経った、一九七三年の聴覚障害者向けに出された新聞記事だった。ろう者のなかでは歴史学で関東大震災研究が盛んになるうとして、その時に、そして、それが基本的には朝鮮人虐殺を中心とした議論が展開されていた時に、ひっそりと、ろう者の虐殺があつたことを発していた。しかしながら、そこからその漫画以外ではその事実は検討されなかつた。

ろう者の虐殺の実態としては、一人の東京聾啞学校の卒業生が虐殺されたことを明らかにした。ろう者にとつていかに自警団の誰何は厳しかったか、それは単に言語だけの問題ではなく、音声言語の問題であることを明らかにした。関東大震災時に朝鮮人を虐殺する前に、「日本人」と「朝鮮人」を区分する方法に「一五円五〇銭」が言えるかどうかという問いがあるが、この問いは「朝鮮人」は濁音を発音できずに、「チューコエン・コチュューセン」と発音すると想定されて使われた問いである。しかし、実際には、「じゅうごえん・ごじゅっせん」と「日本人」のように発音できない人、そもそも質問を理解できない人（例えばろう者）は、「朝鮮人」とみなされて虐殺の対象になつた。つまり、実際は「朝鮮人」を虐殺対象とみなしているように、「日本人」以外を虐殺の対象と規定していたのである。

なお、ろう者の虐殺についても震災時の資料以外では、『日本聴力

障害新聞』まで公に語られることがなかったと思われる。その原因
としまして、震災後のろう教育の問題を見出した。ろう者は関東震災
に限らず、震災頃から音声言語の壁に悩まされ、差別されていた。そ
のようないくつか、震災後、ろう教育者の一部は「良心的」に口話
法を推進していくが、口話がある程度できた人物が震災時に虐殺さ
れた出来事は語ってはならない出来事だった。口話がある程度でき
ても、ある程度で済むだけではない日本人から排除される問題をな
かなか教育者は自覚できなかった。川第三章は、沖縄人が虐殺された、検見
川事件は沖縄県だけではなく、秋田県、三重県出身者が虐殺され
た。そこでは公判のずさんさを指摘した。裁判は福田村事件もそう
であるが、遺族には知らされなかったため、三重県出身者の遺族を除い
て、他の人の遺族は「震災」で死んだのか、「虐殺」で死んだのかわ
からなかったのでは、ないかと思われる。震災後の「復興」のなかで
語られる美談とともに、このような裁判が多くの人から虐殺を忘却
させたと思われる。虐殺を実際に行った人や、その地域の人には語られ
ない。虐殺の出来事は、変形して継承されていく。それが「崇り」である。
いたわけであるが、実際には「日本人」というマジョリテイ側に立つて少

数派である。震災後に虐殺が糾弾され、ささやかではあるが裁判によつて罰せられたという事実が、虐殺を公に語ることを困難にさせ、「崇り」という記憶で継承されるようになった。しかし、このような「崇り」の話も九〇周年を迎える中で、地域に残っていくのもまた難しくなっている。

一方で、被害者側に立つマイノリティーのなかでも第二章のろう者の虐殺でもそうだったが、虐殺について語ることは困難であつた。しかし、鮮明に残る虐殺の記憶は生命の危機とともに想起される。例えば、李沂碩の父は、東京大空襲のなかで、虐殺の記憶が想起され、「朝鮮人」と思われ、東京大空襲のなかで、虐殺の記憶が想起される。また、同じような迫害を受けるマイノリティーにも虐殺の記憶は継承される。沖繩の標準語奨励運動に際して、教師が朝鮮人虐殺を想起して「君達も間違われて殺されないように」と言つた。言語によつて沖繩人がいかに排除されるか、それはいかに生命の危機をよびこむ可能性があるかを想定しての言動だと思われる。実際、沖繩戦では日本兵からの尋問に答えられなかった聾啞者・精神錯乱者などが日本兵によつて殺されている。沖繩戦で生命の危機にさらされていた脚本家・上原正三は「怪獣使いと少年」という作品を朝鮮人虐殺を想起してえがいた。同作品は人気テレビ番組である、ウルトラ・シリーズの一作品であるが、

そこには見事に虐殺がえがかれていた。関東大震災時に沖繩人は実
 際に虐殺されたが、その事実を知らずに作品は作られていた。
 上原沖繩戦による死者の記憶や、上原自身が受けたと思われる戦
 後の標準語教育から朝鮮人の虐殺の死者の記憶とが接し、ウルトラ
 マンにえがいたところから思われる。植民地支配の抑圧により、異なるアイ
 デンティティ・コミュニティ・植民地支配の抑圧により、異なるアイ
 の危機にさらされるマイノリティの記憶を背負ったと
 いこうとである。マイノリティの記憶は同じようなアイデンティ
 ティーを持つ人、マイノリティのようになり、継承されるだろうか。また、思
 える。マジョリテイにはどのようなように継承されるだろうか。また、思
 加害の記憶は継承され得るだろうか。に継承されるだろうか。また、思
 第四章は朝鮮人虐殺のドキュメンタリー映画を撮った、呉充功監
 督の歴史と作品を分析した。呉監督は在日朝鮮人二世であり、また
 幼少の頃に難聴を患った。それにより、日本人からは朝鮮人だと差
 別を受け、しかし、そこから脱するため、入学した民族学校でも難
 聴であるがゆえに差別を受けた。この重層的な差別により鬱屈して
 いた監督は、内なる気持ちを表現するために映画と出会うことにな
 る。

呉監督は在日二世であるが、映画を撮るまで、朝鮮人虐殺に関し

てはあまり知らなかった。朝鮮人虐殺の映画の制作過程で、呉監督は日本人の撮影スタッフと議論して民族差別の認識の違いを確かめ、その原因を追究することになる。また、被害者や加害者の取材から、語られない歴史を、ゲートボールや銭湯、店のお手伝いなどの交流を通じて引き出すことになる。呉監督が引き出した話は、被害者も加害者も虐殺の記憶を重く引きずって生きているというところである。特に加害者に関しては自身の虐殺の主體的な責任から逃れることができない様子がわかる。監督自身はそれを聞き続けることで、今に生きる貴重な証言をフィルムに残した。マジョリテイ側は、呉監督自身は強く「朝鮮人」のアイデンティティを保持しているが、被害者側の記憶だけをフィルムに収めることはしなかった。加害者側の「日本人」と多く接触をもち、被害者たちには「朝鮮人（二世）を想起させ語らせている。呉監督の姿勢の背景には、朝鮮人（二世）であることも重要である」と、難聴であることで生じる二重の差別に直面して生きてきた人生と関係していると思われる。呉監督が大事にしているのは、「対話」であり、それはスタッフ間、加害者、被害者の人たちが、そして映画の聴衆となされる。その「対話」を通して虐殺とは何か、「真実」を問い続けていくことが、虐殺の記憶の継承につながっていく可能性があるとと思われる。ただし、

吳監督は二作目が一九八六年に作られて以来、関東震災の映画は
 作つていない。その原因として、監督の「対話」には、当時の体
 験者が重要な役割を問うているため、体験者不在の時代になつて、
 監督のなかで虐殺を問う映画をつくること、困難になつてきたと考
 えられる。では、体験者不在のなかでどのような困難になつてきたと考
 えることはできるだろうか。犠牲者の調査と追悼をおこなつてきた実
 行委員会活動の論じた。これは私自身の記憶も想起させた。私は
 一〇年以上前の二〇〇二年に東京成徳大学の卒業生として、その時卒
 業論文も千葉県の関東大震災の朝鮮人虐殺を研究テーマにした。卒
 業論文をとくんでいた時に、実行委員会が建てた碑を見に観音寺の住
 職に話を聞いた。何も書いていない、何もない、何もない、何もない、
 今思えば、当たり前の話だが、その意味に想いを馳せることはなかつ
 た。その後、二〇〇五年に専修大学大学院に入学したが、虐殺の研
 究からは少し離れていた。先行研究における「国家」／「民衆」、「日
 本人」／「朝鮮人」という二項対立の問題の枠組みには早くから疑
 問を持つていたが、それを批判した上で、どのよう端に言え、
 再構築できるかわからなかつた。批判した上で、どのよう端に言え、
 実態研究をする上で研究の余地がないように思つていた。虐殺とい

う負の歴史を研究することにおいて新しい史料はなかなか発掘されない。また、その時の時代状況から体験者の聞き取り調査がほぼ不可能だったと考えていたからである。

二〇〇七年に共同研究で実行委員会とコンタクトをとり（実はこの時が初めてで卒業論文の時はとっていなかった）、現地ガイドのフイルドワークに参加したらいろいろと考えることが多く興味深かった。この共同研究でやった行為は「聞き取りの聞き取り」である。

実行委員会は聞き取り調査によって公文書では明らかにされない虐殺を明らかにしたが、共同研究では聞き取り調査をした人に聞き取り調査をすること、何か学び得ないか考えてみた。そこで学んだことは大きく分けて二つある。

一つめは実行委員会が調査した時の地域の歴史、聞き取り調査時の空気が緊張、聞き取り調査の内容、その時にはえがかれなかったことなどがわかるというところである。七〇年代、八〇年代の地域研究における豊富な聞き取り調査は、歴史研究者の問題の枠組みによつて、語り手の主体から切り離されている。語りの本質は、語り手が虐殺という記憶をどのようにならべて生きているかにある。しかし、研究者は虐殺時の様子（一九二三年）やその過程（一九二三年以前）に関心があつて、語り手がその後にはどのように虐殺の記憶を背負って生きてきたか（一九二三年以降）には関心がよせられていない。

虐殺の記憶は加害の地域や被害者と同じようなアイデンティティ

―をもち人たちの間で生きている。その生きた記憶を背負ってきた人たちの人生をふまえて学び、想像することが記憶の継承にとっての第一歩となると考える。そこから新しい問題について考えていき、虐殺を問い続けていくことが、忘却させないことにつながると考える。